
下剋上！

谷梅影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

下剋上！

【Nコード】

N3150I

【作者名】

谷梅影

【あらすじ】

分類「不良」の男の子っぽい女子と、分類「人気者」の女の子っぽい男子の学園的アクション系ラブコメ。…に、なる予定です。只今絶賛混乱中。

蕾桜の出会い 1

運命の時間がやって来た。

分かれ道で、二人は足を止める。

「今日は楽しかったな。」

「だな。」

そう言ったきり、両者は黙りこんでしまう。

「…今度また、遊ぼうな。」

解っていた。その今度がきつと来ない事を。

「じゃあな、四葉！」

「じゃあな。」

友達に手を振り返すと、四葉は振り返らずに自転車を走らせた。

桜の季節がやって来た。

そうはいつてもまだ四月に入っただけで、桜は蕾のままだった。

「…はあ。」

自転車をこぐ四葉の身体は重い。あまりに気が重いので、少し寄り道をする事にした。

河川敷に一本だけ立っている桜の木。花が咲けば多くの人が桜を見にやってくるが、蕾の桜は誰も見に来ていなかった。

自転車を止めると、四葉はその蕾ばかりの桜に向かって歩き出した。鞆の中のエアガンがぶつかって、カチャカチャと耳障りな音を立てた。

滝久保四葉、それが彼の名前である。四葉はこの四月に私立松雲南学園に入る事になっていた。

高校受験が始まる前に、小学校から仲が良かった友達三人と共に入ろうと約束していた学校だった。

しかし受験が終わってみると、四葉以外の友達はいずれも落ちてしまったのだ。

「…はあ…」

溜息がこぼれる。桜の木にもたれかかって座ると、四葉は上を向いた。

抜けるような青空が一面に広がっている。ぼーっと見ているうちにまた友達との思い出が蘇ってきた。

（そういや、プール行った時もこんな青空だったよな…）

そんな回想に浸っていると、不意に声をかけられた。

「お前も花見か？」

舊桜の出会い 2

低い、涼やかな声。四葉は回想を一時中断して、声のした方を向いた。

（うわ、カッコ良い…）

可愛いと言うよりも、カッコ良いという言葉の似合う女性がそこに居た。

整った顔立ちに腰までの長い髪、女子の制服らしき服。そして何故か手には酒瓶を持っている。

「え、えっと…」

答えに戸惑っていると、その女性は「とりあえず、そこ座るから。」と言って四葉の隣に胡坐をかいて座った。

（お前も、って事は…この人、花見に？花も咲いてないのに…？）
四葉の頭の中は、瞬時に現れた女性について考えだす。

（ていうかあの制服、松雲南のだよな…。てことは、先輩？でも、酒瓶持つてるし…）

ぐるぐると思考を巡らせていても、もやもやした疑問は増えていくばかりだ。

「あのっ…」

思い切って、四葉はその女性に質問をする事にした。

「その制服って…松雲南学園のもの、っすよね？」

「ああ、そうだが。」

「その卒業生が何か、っすか…？」

すると女性は予想外の答えを口にした。

「いや、在校生だ。」

（はい？）

「あの、じゃあその酒瓶は…？」

「護身用。」

「は？」

呆気にとられて女性を見ると、少し戸惑ったように女性は言った。
「持たされたんだよ。『何かと物騒な人が多い世の中だから、これを持って行きなさい。』って言われて。」

（いや、制服で酒瓶なんて持っていたら、貴方もその物騒な人達の仲間入りですけど…）

心の中で突っ込みを入れつつも、その女性の容姿と内面の落差に四葉は思わず笑ってしまっていた。

「…？」

不思議そうに首を傾げる女性。

「…そう言えば、えーっと…」

新たな質問をしようとして四葉は戸惑う。女性の事を「あなた」と呼ぶのはどこか気がひけたのだ。

「あきら、だ。」

「え？」

「名前。」

酒瓶をもてあそびながら答える女性に、四葉は少し驚いて目を向ける。

「珍しい名前ですね。」

「よく言われる。」

「漢字は、『明るい』の『明』ですか？」

「いや。『みどり』の『翠』だ。」

（そんな読み方するんだ。）

自分の名前「四葉」も変わっていると言われるが、『翠』も変わっているなと四葉は思った。

「えっと、翠、さんはどうしてここに来たんですか？」

そう問いかけると、翠は酒瓶から視線を外した。

舊桜の出会い 3

「蕾の桜が見たくてな。」

「え？」

翠と視線が合う。

一瞬、風が吹いた。

「…それより、お前は どうしてここに来たんた？」

「俺、っすか？俺は…」

その時、前触れもなく翠の右手が動いた。

「っ！」

目の前に右手が飛んでくる。条件反射で四葉は目を閉じて身を引いた。

おそるおそる眼を開けると、翠は右手で投げられた石を掴んでいた。

「…誰だ。」

押し殺したような声で翠が呟く。その声に応えたのは男の声だった。

「穴戸、翠か。」

四人の男子がやって来る。その面々を確認して、四葉は戦慄した。

（げ、同級生。）

しかも筋金入りの不良で、教師たちも手に負えないような四人組である。

「テメエ結構出張ってるらしいじゃねえか。」

金属バットを持った不良がニヤニヤしながら言った。

「此処らでちよっとシメてく事にしたんだよ。」

木のまわりを囲まれる。四葉はなるべく顔を見られないようにうつむいた。

「…。」

四人に気付かれないように、翠は四葉を引き寄せる。

「…逃げられっか？」

「え？」

「俺にしか目え向いてないうちに、さっさと逃げる。」

四葉は思わず翠の顔を見た。翠は至極真面目な顔で四人の面々を見ている。

「と、年下とはいえど、男っすよ。しかも四人。敵う訳ないじゃないっすか。」

「だろうな。」

「だろうな、って……」

呆氣にとられる四葉に、翠は少し口角を上げた。

「敵わないけど、お前は逃げられんじゃねえのか？」

呟くように言くと、不意に立ちあがった。

「……っ?!」

正面に居た不良に酒瓶を叩きつける。大量の酒と共に不良は地面に倒れた。

そのままバットを持った不良に突進し、流れるような動きで首筋に手刀を叩きこみ昏倒させる。

「デメエ……っ。」

我に返った三人目がスタンガンを取り出す。翠は倒れた不良から金属バットを奪い取ると、顔をしかめた。

「物騒な……」

薔桜の出会い 4

「うるせえっ！」

そう言っていると、もう一人の不良と二人がかりで翠に向かってきた。それを見て翠は嘲るように笑いながら木からさりげなく離れていく。そして一瞬だけ、四葉をちらりと見た。

（逃げる、って、言いたいんすかね…？）

確かに、この場に居ても四葉に出来る事は無かった。

大人しく逃げようと背を向けかけたが、振り返り戦局を見て少し戸惑う。

二人は減ったとしても男二人に対して女一人。しかもスタンガンで牽制され、圧倒的に翠が不利な状況になっていた。

（何か、出来る事は…）

男として人間として放っておくことはできない。

元の場所に帰りながら四葉は考える。その時バッグに木がぶつかって、カチャカチャと音を立てた。

「これ…」

ふと思い当ってバッグの中のエアガンを取り出す。それは今さっきまで親友であった友達と遊んでいたものだ。

（使えるかもしれない。）

四葉は射的の腕は人並みである。したがって、当たる保証はない。

（でも、イチかバチかやってみるしかない。）

エアガンを構える。人に向けて打ってはいけなくと書かれた説明書が落ちたが、今はそんな注意書きに従っている場合ではない。

（当たれ！）

心の中で念じながら、四葉は引き金を引いた。

「うつー！！」

スタンガンを構えていた不良がうずくまる。翠は一瞬驚いたような表情を浮かべたが、すぐにそれは笑いへと変わった。

「…ぐっ…」

地面に落ちたスタンガンを拾い、不良に押し付けた。さらに残った不良にもスタンガン突き付ける。

「てめえらの負けだな。」

そう宣言した瞬間、不良の身体が地に落ちた。

翠はスタンガンのスイッチを切ると金属バットと共に投げ捨てた。そして木へと向かっていく。

四葉は未だ打った時の体制で固まっていた。翠はその横に腰を下ろす。

「…助かった。」

溜息にも似た言葉が四葉の耳に届いたとき、やっと四葉は動くことが出来た。

「あの…」

「お前が居なきゃ、俺は負けてた。」

エアガンを持った手を降ろしておそろおそろ下を向くと、上を向いていた翠と目が合った。

「お前、名前は？」

「よつば…『四枚の葉っぱ』で、『四葉』っす。」

「そうか。」

翠は少し口角を上げると、四葉に向かって言った。

「助かった、ありがとう四葉。」

素直な心からの感謝の気持ち。

その涼やかな容姿からは出ないであろう感情に驚く。それと同時に嬉しくなって、四葉は満面の笑みで「はい。」と返した。

（やばいこの人、すっげえ素敵な人だな、惚れる。）

「あの…」

舊桜の出会い 5

そう四葉が言いかけた時、翠を呼ぶ声がした。

「ななせ七星。」

翠がそう言つて立ち上がる。丘の上に現れた人影は、翠の姿を見つけてこちらにかけてきた。

七星というのだろうか、その女は翠の隣に立つと、軽く翠をつついた。

（うつわ、レベル高！）

一目見て、四葉はあらゆる意味で七星を見られなくなる。

整った顔、程よい身長、そして何より…

（胸、デカ…）

どうしてもそこに目が行つてしまうほど、その体格にはアンバランスだった。

「探したのよ。どこにも居ないから。」

「悪いな、ちょっと面倒事に巻き込まれたんだ。」

伸びている不良四人を指で指し示す翠。七星はそれを一瞥すると、頷いた。

「私が持たせた酒瓶が役に立ったでしょう？」

「ああ。」

七星はふつと笑う。

（え、この人が酒瓶持たせたの?!）

七星は見たところは四葉や翠と同じくらいだ。いったいどこでその酒瓶を調達してきたのだろう。

そんな事を考えていると、不意に後ろから声が聞こえてきた。

「…ときに翠、この少年は誰だ？」

驚いて振り向くと、頭一つ分は身長の違いが四葉を示していた。

「そいつは四葉。今度俺等の学校に来るそうだ。」

「…解った。」

「後輩、と言う事になるのね…」

七星は四葉に初めて気が付いたというように振り返ったが、その姿を見て少し溜息をついた。

（な、何？）

疑問が浮かんだが、気のせいだと思いこむことにした。

「コイツが加勢してくれて、助かったんだ。」

「そうなの。ありがとう。」

七星が、四葉に向かって頭を下げる。

「いや、たまたまつすから…」

謙遜しつつも、七星のような少女に褒められると悪い気はしなかった。

「翠、行くのか。」

「ん、あーそうだな。行くか誠。」

ひらひらと手を振ると、翠は誠と呼ばれた男と、七星と連れだって行こうとする。

遠ざかって行く三つの背中に親友たちを見て、四葉は居ても立ってもいられなくなった。

「あの…」

衝動が思わず声となって出てしまった。口を押さえたが遅く、翠が振り返る。

（な、なんでもいい、言っちゃえ！）

四葉は息を吸うと、口を開いた。

「…翠さんっ、その、その人と付き合ってんっすか？」

我ながら滅茶苦茶な事を言ったものだと思う。

七星と誠が呆氣にとられている中で、翠だけはまるでそれが予想された問いのように答えた。

「…いや、コイツじゃない。」

そう言つと、身体ごと振り返って四葉を見た。

「そつだ、お前も行かねえか？」

「え？」

「今日は卒業式だからな、どっか行こうぜ。」

口角を上げ右手を差し出す。四葉は少し戸惑ったが、やがてその手に向かって歩き出した。

「よし、じゃ、行こう。」

意気揚々と告げると、翠は再び背を向けて歩きだした。

新人生歓迎親睦会 前夜祭 1

桜の季節も過ぎ去って、若葉が混ざり始めた頃。

「翠さんっ！」

屋上のドアを開けて、四葉は弾んだ声で言った。

「お、来たか。」

振り返った翠がペットボトルを振る。四葉は小走りでその場所に向かった。

「遅いわよ。あなたの分のフルーツはなし。」

「勘弁してください、授業長引いちゃったんっすから。」

渋い顔をした七星に言い訳しながらも、四葉は七星と誠の隣に座る。

「四葉、いる？」

「サンキュっす、誠先輩。」

差し出されたペットボトルを受取って、四葉はパンを開けた。

「いったきまーす。」

あの卒業式の後、四葉はすっかり三人と仲良くなっていた。

仲良くするたびに翠が渋い顔をしていたが、四葉は知らないふりをした。

その前に翠が渋い顔をする理由がよく解らなかったのだ。

「学校じゃ、俺達と居るな。」

そして入学式の前日に、突然四葉は翠にそう告げられた。

「なんでっすか？」

呆気にとられて聞き返すと、翠は真っ直ぐ四葉の目を見て言った。

「いろいろ目立つからな。」

（別に、いいんすけどね…？）

そう考えたのだが、その時の翠の並々ならぬ迫力に四葉は思わず頷いてしまった。

「でも、バレなきゃいいんすよね？」

その言葉に翠は一瞬目を見開くと、やがて口角を上げた。四葉はそれが「イエス」をさしているのだと思った。

そして、四葉は翠と約束したのだ。

俺達の事は、誰にも言わない事。気付かせない事。

それを約束して、翠は松雲南学園に入学した。

入学してから四葉は友達もそこそこ出来て、滑り出しは上々だった。

新人生歓迎親睦会 前夜祭 2

「この生活にもそろそろ慣れたかしら？」

突然七星が聞いてくる。四葉は少し苦笑しながら答えた。

「教室解らないけど、なんとかなってます。」

「そう。良かったわ。」

そう言くと、七星は一つ飴玉を四葉の膝に落とした。

「サンキュっす。」

「七星、俺にも。」

「はいはい。」

七星は翠にも飴玉を与えると、弁当のふたを開いた。

色とりどりのおかずがバランスよく入っていて、見た目にも鮮やかだった。

（味も美味いんだろうなー…）

「…それ、自分で作ってんすか？」

「ええ。」

「すごいっすねー。料理できるんすか。」

「あまり上手くはないけど。ひとつあげましょうか？」

「あ、ども。」

卵焼きをもらって口に入れる。

「…甘い。」

「嫌いかしら？」

「いや、あんまり甘くなかったっすから。うちの卵焼き。」

「そうなの。そっちの方も食べてみたいわ。」

そんな会話をしながらちりと翠の方を見る。

基本的に、翠と誠は二人の会話を黙って聞いているらしい。

「翠さんは卵焼き、好きですか？」

会話が続かなさそうなので質問してみる。翠は少し考えてから口を開いた。

「そうだな、俺は…」

「あつきらー!!」

その時、答えをかき消すように無邪気な声がした。

（だ、誰っすか?!）

こちらに走ってくる人影に目を向ける。それは少女のような顔立ちの少年だった。

しかも、着ているのは中学生の制服である。

（なっ…中学生で、翠さん呼び捨てに…!?）

思わず立ち上がりかけた四葉を、誠の腕が押えた。

「先輩、何すか!」

「…落ち着け。」

新人生歓迎親睦会 前夜祭 3

誠はペットボトルを傾けると、無表情に言った。

「翠の彼氏だ。」

「はあっ?!」

先程の中学生を見ると、彼は翠の側に腰を降ろしている。

「ミオ、此処にきて大丈夫なのか？」

「うん、実行委員の打ち合わせって言うてあるよ。時間あるから来たんだ。」

そう言つと、ミオと呼ばれた少年はパンを取り出した。

「お昼一緒に食べても良い？」

「俺は構わないが…七星、どうだ。」

「異議は無いわ。四葉は？」

「え、ええとまあ…いいつす。」

四葉がそう答えると、ミオが四葉に目を向けた。

「? 翠、この人知り合い？」

「そう。四葉だ。」

翠が四葉を示す。四葉は慌てて頭を下げた。

「は、はじめまして。滝久保四葉って言います。」

「よろしくね。僕は姫宮ミオ。」

そう言つてミオは笑いかけてくる。

「あ、はい…」

（こいつ、本当に男の子か…？）

そんな疑問が生まれるほど、ミオは可愛い顔立ちをしていた。

「四葉君、って呼んでいい？」

「あら、仮にも先輩よ、ミオ君。」

「仮にもって何すか。別に構わないつすよ、ミオさん。」

そう言つと、ミオは首をかしげた。

「ミオでいいよ?」

「別にいいんすよ。その…」

口ごもる四葉。

（翠さんの彼氏ですから、なんて、言えるわけないな…）

それに、未だにミオが翠の彼氏であることが半信半疑なのだ。

（だったら、誠先輩の方がよっぽどそれっぽいし。）

ちらりと誠を見ると、誠はぼーっとどこか一点を見つめていた。

四葉に気付くとふっと俯く。その視線を追おうとすると、不意にミオの声が聞こえてきた。

「まあ、四葉君がいいならいっか。」

そう言ってミオは翠と談笑を始めた。四葉は何故か気になって、再び誠の視線を追おうとする。

「あと三年早ければ…」

その時、隣で七星の呟きが聞こえてきた。四葉はその言葉に思わず七星を振り返る。

「どうしたんすか、先輩？」

「いえ、なんでもないわ。」

そう言くと、七星は弁当を食べ始める。

「…？」

不可解だったが、お腹の音に気づいて四葉は自分のパンをかじった。
「……」

新入生歓迎親睦会 前夜祭 4

「そういえば、そろそろだね。」

翠と談笑していたミオが不意に言う。

「何が？」

「新入生歓迎親睦会。」

「何すか、それ？」

聞きなれない単語に四葉は顔を上げた。その反応にミオはしまったという風に口を押さえる。

「…もしかして、四葉君って新入生？」

「そうですけど…」

「やつちゃった。」

ミオは苦い顔をした。翠はそれを見て笑う。

「実行委員自らバラしたな。」

「だって、知らなかったんだもん。」

舌を出すミオ。しかし四葉はそれを見てはいなかった。

（え？笑った…？）

翠に目を向ける。確かに翠は笑っていた。

「ん？なんだ？」

「いいえ！それでミオさん、その新入生歓迎親睦会って、いったいなんなんすか？」

ミオははじめ洩っていたが、やがて「誰にも言わないですよ？」と前置きすると話し始めた。

「新入生歓迎親睦会ってのは、新入生達と先輩たちとの仲を良くしよう、この学校の歴史、校舎の位置づけを覚えてもらおうって目的で毎年やってるんだ。」

もちろん新入生には絶対教えないドッキリ形式。先輩と新入生で五人一組を作って、校舎内に隠された暗号、問題を解きながら目的地に向かうっていうもの。」

「楽しそうっすね。」

「うん。楽しいけど、在校生はいろいろ大変らしいんだ。チームの協力度とか、問題の得点が成績に反映されるみたい。」

「成績に…」

四葉は自分が新入生で良かったと胸をなでおろした。

「でも、したらその暗号の答えとか教え合っちゃわないっすか？」

「それを考慮して、メンバーの一人一人には組み合わせの違うカードが手渡されるんだ。」

しかも目的地も全部で五つあって、最終的に何処に向かうかは問題を解かないとわからない。」

「大変っすね。」

「大変だよ。先生も総動員するし、僕等は組み合わせのカード作らなくちゃいけないし。」

「カードは誰に手渡されるかとか、わからないですもんね？」

「チーム組む人が誰だかわからないんだから、知りようがないしね。」

肩をすくめてミオは苦笑した。

「てか、それ何枚っすか？」

「生徒数がだいたい…900人位だっけ？だから、少なくとも180枚。それを組み合わせがダブらないように12人で作るんだ。」

「…うわ、本当にありがとうございます…。」

その苦労は半端なものではないだろう。自然と頭が下がる。

「いいのいいの。僕も去年は楽しんだ人だったんだから。」

ミオがぽんぽんと四葉の背中を叩く。すると、翠がその頭に手を置いた。

「ミオ、そろそろ時間じゃないか？」

「あっそだ、忘れてた。」

ミオはぴよんと立ち上がると、慌てて空のビニール袋を取り上げた。

「ごめんね翠。また今度来るから！」

「解った。行ってこいよ。」

「うんっ。四葉君、七星さんもまたねーっ!!」
手を振りながら、ミオは屋上から姿を消した。

新入生歓迎親睦会 前夜祭 5

(…あれ?)

手を振り返しながら四葉は何か違和感を覚える。しかしその違和感の正体に気がつく前に、翠が話しかけてきた。

「で、四葉。その新入生歓迎親睦会についてだな。」

「はい。」

「俺と同じグループで参加しねえか?」

「はい、勿論ですつ。」

(待ってました!)

身を乗り出す四葉に、七星が片手を上げる。

「でも、ナチュラルに同じグループになる訳にはいかないわ。」

「え?」

「俺とした約束、覚えてるよな?」

四葉は少し考える。

(俺達の間係を、誰にも悟らせない事、っていう…?)

「はい。でも、それが…?」

「新入生とはいえ、貴方には貴方のグループがあるでしょう? 抜け出してくる理由がない限り下手に抜け出せないわ。」

「そう、ですね。」

そう答えながらも、四葉は少し腑に落ちない点があった。

「あの、どうしてそんな周囲に気付かれたくないんですか?」

そう聞くと、七星は目を伏せた。

「…貴方を守るためよ。」

「え?」

「いえ。そうね…約束違反だからよ。」

目を上げる七星。微笑みを湛えて、四葉を見つめる。

「だから、理由を作る。」

「はあ…。」

四葉は少し首をかしげながら、七星の方を見た。

「ちよつと遅刻してきなさい。カードは貰ってくるわ。」

「あ、はい、解りました。」

四葉がそう言った瞬間、予鈴が鳴り響く。

「あつやば、授業準備してない！」

「あら、もうこんな時間ね。」

四葉と七星はあわてて支度を始めた。

「って翠さん、授業行かないんすか？誠先輩も。」

「俺は七星先生の授業だけで十分だからな。」

「…まだ楽譜が完成していない。」

途中まで書かれた楽譜を見せる誠。しかし譜の読めない四葉には何が書いてあるか解らなかった。

「なんか解らないっすけど…頑張ってください。」

「ああ。」

「じゃっ、失礼します！」

そう言うと、四葉は振り返らず教室まで全力疾走した。

新人生歓迎親睦会 1

新人生歓迎親睦会の当日。

ざわざわしている人混みの中をかきわけて、四葉はもう固まってしまったお馴染みのグループへと足を運ぶ。

「四葉、遅えよ。もうグループ決まっちゃったよ!」

「ごめんごめん。じゃ、どうか居ないとこ探して入ってくるわ。」

片手を上げると四葉はグループに背を向ける。

(よし、後は…翠さんのグループを探して…)

その時、肩を叩かれた。振り返ると誠が立っている。

「少年、一人ならグループに入ってくれるか。足りないんだ。」

「あ、はい。」

そう返事をして誠についていこうとした、その時。

「ちょちょちょ…」

それを見ていた四葉の友達グループが、激しく四葉を引きずっていく。

「何?」

「やばいって、あのグループ!」

「なんで?」

「だって、あの二人の一条誠だろ? 軽音楽部の部長の!」

「え、そうなの?」

(誠先輩って、軽音の部長だったんだ…)

昨日書いていた楽譜を思い出す。となるとあれは、自分で書いていたものだろうか。

「滝久保アンテナ低すぎ!」

「その二年の一条って、同じく二年の穴戸翠とコンビ組んでんだよ。」

「え?」

思わず聞き返すと、友達の一人が指をさした。

「ほら、あそこに居る女。あれが穴戸翠って言うんだ。」

（あれ、だと？しかも、翠さん呼び捨てにした挙句、指をさした…？）

込み上がる怒りの衝動を抑えて、友人の話に耳を傾ける。

「で、そのコンビが、何なの？」

「二人とも不良らしくて、教師も下手に手え出せないんだってさ。」

穴戸が女なのに結構強いらしい。男が三人がかりでも太刀打ちできないんだとよ。しかも一条は三年の先輩と繋がってるらしくて、同級の男子も怖くて何も言えないって。」

（不良…）

「へえ。」

「中学時代はあの二人、相当ヤバかったらしいぜ。何回も停学とか喰らってて、高校入ってから落ち着いた方だって。」

四葉は怒りに震えながら納得する。確かに、こんな事は本人の口から言えないだろう。

「あ、でも、同じグループに居るな。二年の崎宗七星先輩！」

「ほら、あのめっちゃ胸でかい女だよ！すっげえ美人の。」

「頭脳は学年トップで、ほんとレベル高いぜ。不良コンビ居るし高嶺の花かもしれないけど、お近づきになりたいなら敢えて行ってみるのも…四葉？」

四葉は深呼吸すると、今の自分に出来る精一杯自然な表情で言った。

「じゃ、高嶺の花とお近づきになってみるわ。」

それだけ言つと、立ち止まってこちらを見ている誠の元に駆け寄つた。

新人生歓迎親睦会 2

「…顔。」

前を向いて歩いたまま、誠はぼそつと呟いた。四葉はそれに小声で答える。

「え？」

「四葉は表情が表に出過ぎる。」

「…今、どんな顔してるっすか？」

「顔は笑っているが眼は笑っていない。むしろ目線だけで人一人殺せそうだ。」

その言葉に驚いて、四葉は慌てて顔をぺちぺちと叩く。

「俺も、そんな顔出来るんっすね…」

今までそんな表情を指摘された事は一度も無かった。そんな四葉に、誠は問う。

「出来なかったのか？」

「本気でなんて怒らないっすから。誠先輩はありますか？」

「…何回かならな。」

そんな会話をしているうちに、また沸々と怒りの感情が湧きあがってくる。

（あいつら、翠さんを…）

「あまり怒らなくていい。」

誠はちらりと四葉を見ると、また言った。

「あんな会話でいちいち怒っていたら、四葉の方からぼろを出す。」

「だって、翠さん呼び捨てにした挙句、不良なんて…！」

「不良だというのは本当の事だ。四葉の同級生の話には多少誇張があつたものの、俺と翠が不良であることは事実だ。」

「…」

「それでも、お前は俺についてきた。」

誠は足を止める。複数のグループが四葉声をかけようとして、誠の

姿を見るなり慌てて去っていった。

「…それは何故だ？」

（そんなの簡単でしょ。）

心の中で呟いて、四葉は誠に向かって言った。

「先輩達が好きだからっすよ。」

「…そうか。」

誠は再び足を動かした。四葉はその後をついていく。

「そうだ。さっき聞いた話、翠には内緒にしておいてくれ。」

ほとんど聞き取れないほどの声で、誠は不意にそう呟いた。

「…あたぼーっす。」

人混みを抜ける。そして初めて誠は振り返ると、やや戸惑った顔をして四葉に聞いた。

「四葉。あたぼー…って、なんだ？」

新人生歓迎親睦会 3

「『当たり前です、お坊ちゃん。』じゃねえの？」

「そんな上品じゃなかった気がするんすよね…なんでしたっけ？」

「『当たり前よ、坊やたち』でしょう。」

「何処のお姉さまっすか、七星先輩。」

「あるいは『あたりめだぜ、坊主。』かも知れないわ。」

「お姉さまから一気に親父に降格しましたね。しかも坊主の食い物の趣味が渋すぎるっす。」

「突っ込むべきところはそこか？」

「そんなやりとりをしながら四葉は辺りを見回す。ちなみに今はルール説明の真っ最中である。」

「一応ルールを聞いている聴衆に配慮して、小声で『あたぼー』の意味について話し合い考えているのだ。」

「そんな事をしなくとも、四人の周りには誰も居ないのだが。」

「そう言えば四人しか居ないっすけど…あと一人は誰っすか？」

「ああ、ミオの予定だ。」

「ミオさんが…それは心強いっす。」

「四葉は楽しそうに呟いた。」

「こっこののは好きなの？」

「もうめっちゃめっちゃ大好きっす！」

「そう。なら、精一杯楽しみましょう。」

「七星も微笑む。その時、開始のベルが鳴った。」

「一斉に散っていくグループ。四葉はうずうずと疼く足を抑えるために周囲を歩き回った。」

「滝久保君、ちよつと鬱陶しいわ。」

「だって待ち切れないっすよ！」

「落ち着きなさい。目立つわよ。」

その時、四葉は友達のグループがこちらを見ているのに気が付いた。

四葉の視線に気がつくと一緒に親指を立てる。どうやら、

（頑張れよ。）

と言っているらしかった。

（お前らもな。）

四葉も親指を立てて返す。怒りが解けたわけではないが、とりあえずは形式的な返礼である。

「ちよつと、そのグループ、四人だけですか？ ぼくも入れてください！」

弾んだ声と共に、ミオが到着する。その後小声で七星に向かって聞いた。

「…で、いいのかな？」

「ええ。上出来よ。」

七星はそう言うのと立ち上がる。

「さて、それじゃ始めましょうか。」

「あの、七星先輩。どんな感じなんすか？」

「そうね、私はリーダーで、貴方とミオ君をリードする感じよ。人が居る時はね。」

「いなければ…？」

「言わずもがな、五人で頑張らしましょう。」

「はいっ！」

四葉が弾んだ声で返事をする。そして、五人は校舎の中に入ってしまった。

新入生歓迎親睦会 4

ところで、松雲南学園は校舎が大きく、教室の数も多い。これは教育方針に基づいた結果であるといえるだろう。

「一人一人に合った教育を」の精神で、ほとんどの科目はクラスに分かれる習熟度別の授業となっている。

「問題は、何処に隠されてるんすか？」

グループが走り回っている広い廊下を歩きながら、四葉は両側の二人に聞いた。

「だいたいは見える所に張ってあるんだけど、たまに意地悪な場所にある時もあるんだ。」

「去年は引き戸の引く方の窓の内側に貼ってあったわ。引き戸を引いたまま見てしまったグループが続出して、脱落者が相次いでいたわね。」

「うわ…怖いっすね…」

「大丈夫だよ。今年はみんな注意してるし、ちゃんと見るから。」
ミオがぽんぽんと四葉の腕を叩く。

「そういえば、問題は誰が貼ってるんすか？」

「放課後に教師が総動員してるみたい。」

「それは…大変っすね。」

「どうかしら？先生達も結構楽しんでるみたいよ？」

「え？」

廊下に立っている先生たちを見る。通りがかる生徒達を見てはこやかにほほ笑んだり、冗談交じりの会話もしたりしていた。

「…」

「準備は大変だけど、みんなが楽しめるイベントなんだよね、これ！」

弾んだ声でミオが言う。四葉はそれに笑って応えようと、七星の持っているカードに目を落とした。

「あれ、最初の問題、見つけたんすか？」

見ると、はじめの解答欄にはバツ印が記入されていた。

「そうじゃないわ。最初の問題はカードと共に配られるのよ。それで、何処に向かうかのヒントもね。」

「へー……」

そう言つて、四葉はカードを見る。

メンバーの名前の下に解答欄が6つ。そのうちのひとつにバツ印があるので、残りは5つだった。

「じゃあ何処に行くか、解ってるんすか？」

四葉の問いに、七星は微笑んだ。

「ええ。」

「どこっなんすか、そこ？」

「そうね……じゃあこの問題、解いてみなさいな？」

差し出されたカードには、数列が並んでいた。

『 $(x - a)(x - b)(x - c) \cdots (x - z)$ を計算しなさい。

この答えが次の問題の場所となる。』

「……何これ？」

カードを覗きこみ首を傾げるミオに、七星は笑った。

「ミオ君は展開を習っているかしら？」

「うん、塾で習った。でもこんなの解らないよ。」

「同じく。これ、相当計算するのに骨が折れるじゃないっすか。」

四葉が七星にカードを返す。

「パスパス。地道な計算は趣味じゃないっす。」

「あら、計算なんて要らないわよ？」

そう言つと、七星は翠にカードを回した。

「速攻で解けないかしら？」

翠はそのカードを見て、それを誠に回した。

「……瞬殺だな。」

「確かに。」

そう言つて、誠が七星にカードを返す。七星は再び四葉にカードを

手渡した。

「計算は必要ないわ。やってごらんなさい。滝久保君、ミオ君。」

「ええー……」

四葉はじつとそのカードを見る。横からミオものぞきこんだ。

（とりあえずアルファベット26こ全部かけ合わせるんだから、 $x^{\wedge}26$ と……？）

しかし、その先が浮かばない。うーんと唸る四葉。ミオもしきりに頭を捻っている。

そんな二人に、七星は言った。

「じゃあヒントよ。この式が計算できないのは、何故？」

「そりゃ……数が多いからじゃないっすか？」

「他には？」

「え、他っすか……？」

「アルファベットの式だから、かな？」

「そう。これは、アルファベットの式ね。」

につこり笑う七星。しかし四葉とミオには何の事だか解らなかった。

「解んねえなら、最初からこの式を声に出して言ってみれば解るぞ。」

「

翠が後ろからそう言う。それを聞いた七星はやや渋い顔をした。

「あら翠、それは大ヒントじゃない。」

「？…えっと、 $(x - a)(x - b)(x - c)(x - d)(x -$

$e)(x - f)(x - g)(x - h)(x - i)(x - j)(x -$

$k) …$ 」

歩きながらぶつぶつと式を唱える四葉。ミオも小声で式を唱えている。

その瞬間、四葉の目がはっと見開かれた。

「解ったっす！」

新入生歓迎親睦会 5

「答えは0、っすね！」

「当たり前。」

七星が微笑む。

「え、なんで？」

ミオが首をかしげる。そんなミオに翠が笑いながら言った。

「めんどくさいから後ろから言うぞ。 $(x - z)$ $(x - y)$ $(x - x)$ …」

「あー、そういうことー!!」

ミオはぱつと晴れ晴れとした顔をした。

「 $(x - x) = 0$ で、0に何かけても0だから、答えは0。そういう訳かー。」

答えが解ったものの、同時に四葉は首を傾げる。

「でも、0って…?」

「∴0が付く教室は、今年増設された第0教室。」

誠の説明に、七星は頷きある扉の前で足を止めた。

「ええ。この教室以外、ないわ。」

その扉の上には『第0教室』と書かれたプレートが下がっていた。

「さて、この調子でちゃっちゃと終わらせっか。」

翠が伸びをする。四葉はわくわくしながら、第0教室の扉を開けた。

新入生歓迎親睦会 6

「次…のポイントは、第六教室ですね。」

カードに答えを書きこんで、とある少女が呟いた。

黒髪のポニーテールに中学生の制服。手に持ったカードには、既に三つほど答えが埋まっている。

「行きましようか。」

メンバーに声をかけて、少女達は教室を出る。その途端走って来た別のグループの生徒が少女にぶつかって来た。

「きゃっ…」

よろけた少女を高校の制服を着た少年が支える。

「大丈夫か雛子。」

「ええ…大丈夫です、時紅^{しぐれ}。」

支えられた雛子を一瞥すると、生徒は走り出そうとする。その生徒の腕を同じく高校の制服の少年が掴んだ。

少年は生徒に向かって無表情に言い放つ。

「ぶつかつたぞ。」

「うつせーな。」

掴まれた腕を振り払おうとした生徒は、少年の腕についているものを見て戦慄した。

「…謝りもしないのか？」

その生徒は信じられないというように雛子を見ると呟く。

「雪原雛子…！？」

「呼び捨てか？」

掴んだ腕に力を込める少年。生徒の顔が歪む。

「氷雨^{ひさめ}、もう良いですよ。」

雛子がそうつと、氷雨と呼ばれた少年は手を離れた。

「次からは気を付けてくださいね。」

笑顔で言う雛子に、生徒は「は、はい！」と言うと逃げるように去

っていった。

「…大丈夫ですか、リーダー？」

「大丈夫です。ちよつとよろけただけなんです。」

心配そうに問う氷雨に雛子は笑顔で答える。

「氷雨、腕。」

その時、時紅しぐれと呼ばれた少年が氷雨の腕を指した。

「…ああ…」

腕に目を落とした氷雨は、頷いて「風紀委員会」と書かれた腕章を取る。

「お前確信犯だろ？」

「さあ。」

腕章を時紅に渡すと、氷雨は肩をすくめた。

「雛ちゃん。あの人どうする？」

眼鏡をかけた高校の制服の女が走り去っていく生徒を顎で指した。

「あいつの情報、いいものも悪いものも全部持つてるけど。」

「何もなくていいですよ。」

雛子は生徒の後ろ姿を見ると首を横に振った。

「心配してくれてありがとうございます、春佳さん。」

「うん。じゃ、優太呼び戻さなきゃ。」

そういうと、春佳は携帯を取り出した。

「え？優太さん、何しようとしてたんですか？」

「雛ちゃんの答え次第で何でもできるようにね。」

黒い笑みを浮かべると、春佳は携帯をいじり出した。

「…ただいま…」

それから数十秒後、優太が帰ってくる。

「おかえんなさい。」

少し茶色がかった髪に高校生の制服。かなり整った顔にはうつすら汗をかいていた。どうやら走ってきたらしい。

「雛子ちゃん、大丈夫だった？」

心配そうに問いかける優太。

「次やったらあいつ、ただじゃおかないから。」

「手伝いますよ優太センパイ。」

時紅が拳を鳴らす。雛子は苦笑交じりに言った。

「だいじょうぶですから。みんな大げさですよ、少しぶつかっただけじゃないですか。」

「そうだろうけどねえ……。」

春佳が時紅と目を合わせる。雛子は笑顔を浮かべると言った。

「さっ、行きましょう。早くしないと遅れちゃいますよ!」

新入生歓迎親睦会 7

ざわざわとした廊下を通る。雛子の両隣りを氷雨と時紅が歩き、前方を春佳と優太が歩く。

「会えねーかなあ……」

すると不意に優太が呟いた。

「誰にですかあ？」

「あの人。」

「？」

首を傾げる時紅に、春佳が振り返って言った。

「崎宗さんだよ。」

「崎宗？」

「高二の。」

「あー、崎宗七星か。」

時紅がポンと手を打つ。その瞬間、優太が勢いよく振り返った。

「呼び捨てとは失礼な！」

その剣幕に時紅は思わず後ずさる。雛子は聞き覚えのない名前に首を捻った。

「崎宗七星……さんって？」

「去年のミス松雲だよ。頭脳明晰な美少女。」

「ああ……あの人ですか。」

優太に言われて雛子は思い出す。柔らかな笑顔で壇上に立っていた、綺麗な女の人の姿。

「ホントに素敵な人だよねー。俺にぴったりだと思わない？」

その言葉に、他の三人が一斉に冷たい視線を向けた。

「な、何？」

「……まあ、ム力つく事に美少年ですもんね。優太センパイ。」

「頭も良いと聞きました、ム力つく事に。」

「運動もできる完璧男で、ム力つく事に去年のミスター松雲だしね

えー。」

三人の冷たい威圧に耐えきれず、優太は雛子の元へダッシュする。

「雛子ちゃん、俺は何か変なこと言っただかな…？」

「あ、あははは…」

泣きそうな顔で問いかけられても、笑ってごまかすしか出来ない。確かに優太は成績もよく運動も出来て顔も良い。しかし自分でそれを自覚しているのだ。

（七星先輩がぴったりだって言うのも自意識過剰じゃないから、そこがム力つくのかも…。）

「まあ振られっぱなしだからざまあねえな。センパイ。」

時紅がにやっと笑って優太を小突く。

「え？」

「そうなんだよ、なんでか知らないけどね。」

春佳が肩をすくめる。

「あたしの情報ネットワークを持ってしても理由が解んないの。」

「あ。その情報ネットワークでさ、今七星さんが何処に居るのか解んないかな？」

「なんで？」

「話してたら会いたくなつた。」

きらきらした目の優太に溜息をつく春佳。

「もはやストーカーじゃね？」

「し、時紅。それを言っでは…」

雛子が慌てて時紅の口を押さえる。しかし優太は苦笑交じりに答えた。

「いーのいーの。俺ももう、なりふり構ってないから。」

「…今居る場所は、情報教室。」

春佳が携帯の画面をのぞいて言った。

「メンバーは…っと、お、姫宮ミオが一緒だー。」

（え…?!）

その情報に、雛子の心臓が跳ね上がる。

「…リーダー。」

氷雨がポンと雛子の肩に手を置いた。

「な、何ですか…？」

「顔、真っ赤ですよ。」

につこりと微笑むと、氷雨は言葉を続ける。

「姫宮ミオの事が好きなんでしょう？」

「そ、そうですね…。」

答えてから慌ててまわりを見回すと、他の三人も心なしか微笑んでいる…ように見える。

「行くかあ？そいつんところ。」

「行こうよ雛子ちゃん！」

「センパイはただ崎宗七星に会いたideきでしょうが。」

「そんな事…思ってます。」

「あんたは黙ってなさい。」

春佳はぴしゃりというと、雛子に笑顔を向けた。

「行っても良いんだよ、雛ちゃん。」

「いつ、いえ…！」

雛子は首を横に振った。それから真っ赤になった頬を押さえつつむいて、ぽつりと呟く。

「その…邪魔、してはいけないから…会えたらいいな、と言う事だけを考えて…。」

ふと顔を上げると、氷雨以外の三人は床に倒れて悶絶していた。

「な、何ですか！」

「やべえ、雛子が純情だあ…。」

「綺麗すぎる…浄化されそうだ…。」

「頼む、俺を見ないでくれえ…。」

「…。」

何も言えずに雛子は三人を見る。すると氷雨が代わりに言った。

「ほら三人とも、リーダーが呆れてますよ。」

「…すいません、調子に乗りましたー。」

そう言つて三人が起きあがる。雛子は深く深呼吸をすると、三人に
宣言した。

「次のポイントは第六教室です。早く行きましょう。」

新入生歓迎親睦会 8

「これで全部っすかね？」

最後の答えが書きこまれるのを見て、四葉は頭を掻いた。

「そのようね。」

「案外簡単に見つかったな、今年は。」

翠がカードを覗きこむ。ミオもそれを見て言った。

「問題も簡単で良かった。あとはこれを元にゴール探すだけだね。」

「ああ。もうちょっとだな。」

「でもこれ…何すかね？この答えにゴールのヒントが？」

「そうよ。最後の問題は少し難しいのよね。」

首を傾げる七星。

邪魔をするといけないと思い、四葉は近くの椅子に座って現在地である第15教室を見渡した。

通常の教室となんら変わらないが、なぜかこの教室には水道があった。

「俺降参していいか？」

「…ええ。」

翠も早々に諦めて手頃な椅子に座る。

沈黙の時間が教室内に流れた。

四葉達のグループが今まで出会った問題は、以下の通りである。

「僕等の答えも次に乗っけとくね。」

2、パリ北西部に位置する、パリ市内で最も美しい大通りとは何か？

3、ある教室でフレッド、マリヤ、チャールズ、リチャード、ハンスが話している。

彼等が来るのを見ていたノエルに彼等が来た順番を聞くと、以

下のような答えが返ってきた。

「フレッドが来たとき、リチャードとチャールズが話していたわ。マリヤは一番最後に来ていたわね。ハンスが来たとき、教室には三人先客が居たわ。あと、チャールズとリチャードは一緒に来たわよ。」

さて、一番最初に来たのは誰か？

4、ギリシャ神話で冥界の王とされ、プルトンと言う別名を持つ神の名は？

5、地球上でもっとも広い海の名は？

6、調味料の「さしすせそ」のうち、「し」をあらわす調味料は何か？

新人生歓迎親睦会 9

四葉達の答え

1、0

2、シャンゼリゼ

「それにしても、シャンゼリゼって聞いたときのミオさん、すっごく輝いてましたね…」

「当たり前だよ。僕三歳の時まで本物のシャンゼリゼ歩いてたんだから。」

問題を解くのに飽きたのか、四葉の隣に座ったミオが笑って言った。
「え？」

「僕ハーフなんだよ。お母さんがフランス人、日本人の血の方が強かったらしいから、茶色の髪の毛以外は日本人だけだね。」

「そうなんですか…」

それだけ言うと、ミオはふらふらと翠の方に向かっていった。

3、リチャード、チャールズ

「これ、結局どっちなんですか？」

「どっちでもあるんじゃないのか？」

答えを見返した四葉の呟きに翠が答える。

「逆に二つある所がなんかのヒント、みたいな。」

「なるほど…。」

「まっ、間違ってたらごめんってことだな。」

4、ブルート

5、太平洋

6、塩

「これは料理をする人にとっては楽勝ね。」

「解んなかったっす…」

「滝久保君、覚えておくといいわ。」

「良いつすよ料理なんてしないし。」

「いい夫になれないわよ？」

「いいんすよなれなくて。ねえ誠先輩？」

いきなり話題を振られ、誠は少し驚いた顔をした。

「…何故俺なんだ。」

「すみません、料理できなさそうなイメージあるっす。」

「いや、結構料理出来んぞ誠は。」

翠が誠を指した。四葉は呆気にとられて誠を見る。

「…え？」

「だいたい作れる。」

「マジっすか。今度食わせてくださいっす。」

「ああ、今度な。」

誠は四葉に微笑みかけると、カードに目を落とした。

「…解らないわね。」

七星が溜息をついてカードを誠に回した。

「そんなに難しいんですか？」

「共通点を見出そうとしたんだけど…なかなかうまくいかないの。」

「問題が数学に地理に神話に家庭科にパズルだもんな。」

うんうんと頷くと、翠は誠に回したカードを受取る。ミオもそれを横からのぞきこんだ。

「古典的にアナグラムとかはどうですか？」

「それも考えて試したわ。だけど駄目。」

「最初の文字をつなげていくのは？」

「ぜ、し、り、ち、ぶ、た、し。これに何か意味は？」

「…無いっすね。」

「でしょう？」

七星は大きく息をつくとき、四葉の向かい側に座った。

「これはもう、問題の答えが間違つてるとしか思えない。」

「間違つてるんすか？」

「解らないけど、これほど考えても解らないって事はそうかもしれないわ。」

そんな事を話していると、不意に翠が呟いた。

「…待てよ。」

「どうしたつすか？」

「答えが二つある問題、チャールズとリチャードのやつ。あれ、何だったか覚えてつか？」

「えーっと…確か、」

「『ある教室でフレッド、マリヤ、チャールズ、リチャード、ハンスが話している。彼等が来るのを見ていたノエルに彼等が来た順番を聞くと、以下のような答えが返ってきた。』

「フレッドが来たとき、リチャードとチャールズが話していたわ。ハンスが来たとき、教室には三人先客が居たわよ。マリヤは一番最後に来ていたわね。あと、チャールズとリチャードは一緒に来たわ。」

さて、一番最初に来たのは誰か？」

（覚えてんすか！？）

目を閉じて完璧に問題を暗唱する七星に驚きながらも、四葉はその問題に何か引つかかるものを感じた。

「あれ…？」

（なんか、おかしくね？）

しかしその違和感の正体には気付けない。じりじりしていると、翠がぱんと手を打った。

「ノエルが居ない。」

「は？」

「…ああ。」

七星がそういえばと言う風に手を叩く。

「どういう事っすか？」

「出題者が教室に来た順番を聞いたのはノエル。思いきり書いてあつたじゃない、『彼等が来るのを見ていたノエル』って。」

「…だから、ノエルが最初に教室に来た、と？」

「そういう事よ。」

思わぬ答えに四葉は脱力する。

（盲点…って、言うのかこれ？）

「とりあえず、これで答えは一問違っていたわね。」

「他の問題に間違いは無いはずだ。つまり0、シャンゼリゼ、ノエル、プルート、太平洋、塩って事になるな。」

翠が腕組みする。すると七星がカードを手にとって、しばらく見つめる。

「…はい。」

それを誠に渡すと、すたすたと四葉の元へやってきた。

「七星先輩、考えなくて良いんすか？」

隣に座った七星を見て、四葉は七星に尋ねた。

「あんまり活躍しすぎちゃうと、つまらないでしょ？」

七星はそう言つて微笑んだ。

「楽しいのはみんなで考えて、みんなで答えを見つけ出す事。答えが解っちゃう人に任せっきりなんてつまらないでしょう？」

だから、私は休憩。」

「…」

四葉は何も言えずに七星から視線をそらした。

「滝久保君は参加しないの？」

「…俺、パズルとかは苦手っすから。考えるのって好きじゃないん
っす。」

「あら。考える事って、すごく面白いのに。」

くすくす笑う七星。四葉は手を組むと、カードを手に考え込む三人
に目を向けた。

「最初のひらがなを繋げても意味はないな。」

「頭文字はどーかな？」

「Z、S、N、P、T、S、か？」

「翠、シャンゼリゼの頭文字はC。あと、太平洋はP。」

「…サンキュー。」

少しうつむき気味にそういう翠。その顔が微妙に赤くなっている。

（照れてんすかね…？）

そう考えて、四葉は思わず微笑んだ。

「Z、C、N、P、P、S。うーんなんだろ、アナグラム？」

「…そんなつづりの単語、あるか？」

「考える限りでは…ないな。」

誠の答えに、翠はカードを机に置いた。

「じゃあ、何か間違ってるのか？」

「プルートは、冥王星だ。」

（このタイミングで言うのか、誠先輩！？てか知ってたの?!）

ふと横を見ると、七星もおかしそうにくすくす笑っている。

（先輩、自分で「プルート」って言ってましたよね…？）

そう七星に突っ込みかけて、四葉はふと気付いた。

（まさか…わざとっすか?!）

「知ってたのか？」

「…あまりに夢中なので言えなかった。」

「別にいいから言えよ。」

翠が溜息をつく。誠は困ったように頭をさげた。

「すまない。」

「いや別に…謝られても困る。」

落ち着かなさそうに言っていると、翠は机に置いたカードの解答欄「プル
ート」を二重線で消した。

「で、答えは？」

「ハデス。」

「とすると…Hか。」

「ああ、Z、C、N、H、P、Sだ。」

「アナグラムは無理そうだな。とすると、規則性…か？」

「可能性はある。」

「何の規則性だ…？」

翠が頭を押さえてぶつぶつと何か言い始める。誠もカードを見つめながら、しきりに考え込んでいる様子だった。

ふと右を見ると、いつの間にかミオが居た。

「ミオさん。考えないんですか？」

四葉が声をかけると、ミオは笑顔を向けて言った。

「僕には少し難しいみたいだから。ちょっと休憩。」

「そうっすか…。」

そう答えて四葉は翠達に目を向ける。二人は今は規則性を見つけようと話し合っていた。

（改めて見ると、本当に恋人みたいっすね…。）

見方次第では良い友人とも見られる。が、それはやはり翠が女性であるという所以であろう。

（やっぱ、翠さんと誠先輩ってお似合いだな。）

そう考えて、四葉は慌ててその考えを打ち消した。

（うわ。俺、翠さんの彼氏の隣で何考えてんだろ！）

ミオの方を見ると、ミオは四葉には気付いていない様子で視線を宙に泳がせている。

「…滝久保君。」

「はい？」

不意に七星に名前を呼ばれて、四葉は振り返った。

「はい。」

すると黒光りする銃に似た何かが二丁手渡される。

「って、これ拳銃つすよね?!」

「失礼ね、エアガンよ。」

七星は一丁を手にとると、くるくるとそれを回す。

「崎宗印だけだね。少し手を入れさせてもらったわ。」

「違法つすよ?!」

「別に良いのよ。バレなきゃ。」

そう言くと七星はエアガンを四葉に渡した。

「これから行く場所は危険かもしれないから、一応護身用に。」

「どんだけ危険なんすか、これ…。」

そう言いながらも四葉は手渡されたホルスターを装着し、エアガンをしまった。

「私の答えが正しければ、98%は危ないわ。」

「残り2%は?」

「予防線よ。」

その答えに四葉は溜息をつく。

「ミオさんにはいららないんすか?」

「要らないわ。」

「先輩には?」

「私はここ。」

七星は自らの頭を指して微笑んだ。

「そうつすか…。」

溜息を我慢して、四葉は翠の方を向く。どうやら最後の関門に入っているらしかった。

「…となると、Zが邪魔だな…。」

「いや待て。翠、Zじゃないかもしれない。」

「じゃあなんだ?」

カードに目を映した瞬間、翠の目が見開かれる。そして翠は椅子を蹴って立ち上がったいた。

「どうしたんすか、翠さん？」

「翠？」

呆気にとられる四葉とミオをよそに、翠は七星に向きなおる。

「七星、解った。」

「答えは何かしら？」

翠は嬉しそうな、少し不安そうな瞳で七星を見て言った。

「生物教室だ！」

「正解。」

七星が微笑む。

「で、行くのかしら？」

「……う……ん……。」

その問いに、翠の表情が曇る。四葉は戸惑いつつも椅子から立ち上がった。

「な、何か知らないっすけど、答えは出たんすよね？じゃあ行きましようよ！」

「そうね。早くしないと、滝久保君が一人で行ってしまうわ。」

微笑みながら七星は翠に言う。

「い、行かないっす。ただ答え出てるのに、行かないってのはもったいないじゃないっすか。」

しばらくの沈黙の後、翠は頷いた。

「…行くか、生物教室。」

廊下を歩く。そろそろ終了時間が迫ってきているため、どのチームもラストスパートをかけているらしい。

「そついや、時間制限つてあつたんすね。」

「ええ、親睦会は十二時三十分を終了するわ。昼食をとって最優秀成績チームの表彰。そして通常の午後授業ね。」

「え、午後授業あるんすか。」

四葉は少しげんなりする。七星はくすくす笑つて言った。

「私達は午後は問題の回収だけだから楽だけど。」

「羨ましいっす。」

そんな話をしている間に、生物教室の前まで来る。

「そついえば、七星先輩。こつて危険な場所なんすか？」

ふと思ひ出して四葉は七星に聞いた。

「まあ危険ね。でも、きつと大丈夫よ。」

「…はあ。」

その時、翠の溜息が聞こえてくる。四葉は振り返つて翠を見た。

「どうしたんすか、翠さん。」

「…お前とミオには、迷惑かけるかもしれねえ。中に居るのが教師でも、違ふ奴でも。」

「…？」

その言葉の意味が解らずに四葉は首を傾げる。しかしミオには解っているらしかった。

「僕ならだいじょーぶ。ちゃんと強くなつたからね。」

そつ言つて翠の肩を叩く。四葉もそれに便乗するように頷いた。

「だ、大丈夫だと…思つつす。」

「あら、私には？」

「…そつ思つてんのか？」

「全然思つてないわ。」

七星は微笑む。翠も少しつられて微笑んだ。

（えーっと…でも、そんなに危険？誰が居るんだろう？）

そう考えた瞬間あらぬ妄想が頭の中を駆け回り始めたので、四葉は慌てて首を振った。

（で、でも…皆居るから、大丈夫つすよね…。）

瞬間、「98%は危険だ」と言う七星の言葉が頭をよぎる。

（…2%にけるっす。）

泣きたい気持ちで、四葉は生物教室のドアを開いた。

「…」

「…」

「…」

「…」

（帰っていいですかー?!）

ドアを開けた瞬間、目の前には煙草を吹かした不良が十人ほど居た。しかも、翠を襲おうとしていた四人も居る。

「よお、奇遇だなあ。」

不良の一人が翠に気づいて片手を上げる。翠の方を見ると完全にげんなりした様子で、

「教師あとでクロス教師あとでクロス教師あとでクロス…」

（こっちはこっちで何か怖い!?!）

「…誰、あの人？」

袖を引っ張られ、こっそりミオが四葉に聞いてくる。

「卒業式の時に翠さんを襲ってた人っす。」

「翠を…?」

そう呟くと、ミオの雰囲気が一気に変わった。

（…っ…!?!）

「ミオ君、落ち着きなさい。」

七星がミオの肩を叩いた。その言葉にミオは深呼吸をして眼を閉じる。

「てめえのせいで額縫うはめになっちまったんだよ。」

不良の一人…おそらく酒瓶を叩きつけられた者だろう…が、翠に近づきながら包帯を巻いた額を指さした。

「…ご愁傷様。」

翠はさして表情を変える様子もなく、それどころか同情の意をこめて言った。

「この傷の借り、返してもらうぜ。」

苛ついたように言つと不良は思いつきり翠を殴った。

「…翠さん！」

四葉は翠に駆け寄る。口の中が切れていたが、幸いな事にあまり大きなけがではないようだ。

「…おい。」

戻ろうとする不良の肩を、誰かが掴んだ。

「あ？」

「誰殴ったか解つてんのか？」

同時に不良の頬に拳が叩きこまれる。

「ぐ…っ！」

よろめく不良。続けざまにもう一発殴ろうとする誠に、低い声が聞こえた。

「やめろ、誠。」

鳩尾にストレートが叩きこまれる。倒れて悶絶する不良をよそに、翠は不敵に口角を上げて言った。

「自分で仕返しくらい出来るっつーの。」

その後ろに、もう一人の不良が忍び寄る。

「翠さん！」

しかしエアガンを抜くより早く、ミオが動いていた。

「この…チビ！」

「チビでも君よりは強いんだよ。」

気を失った不良を床に転がして、ミオは笑って指を鳴らした。

「ごめん翠。別に良いよね？」

「…しょうがねえな。」

溜息をつく、翠は残った不良に近付く。

「ちよつと聞きてえ事があんだけど。」

「…っ！」

穏やかに聞く翠の後ろから、三人が同時に襲いかかってきた。

「この…っ！」

エアガンを抜くと、四葉は武器を持った者を狙って打った。そして続けざまに二発。

「…サンキュー、四葉。」

倒れた三人を振り返って、翠は口角を上げて言った。

「…て、威力強っ！？」

三人を見ると、生きているものの動かない。心配になって七星に目くばせすると、七星は何を言いたいのかわからないような微笑を浮かべた。

「んで、話す気はねえと？」

「ねえよ。」

残った不良が五人を取り囲む。翠は大きなため息をついた。

「教師の居場所知ってつか知らねえくらい聞いても良いだろ？」

「知らねえな。」

「それが終わったらさっさと教師ころ…見つけに行きたいんだが。」

（ちよ…今翠さんから不穏な言葉が聞こえた?!）

「その前にこっちに付き合ってもらうぜ。」

その言葉を合図に不良達が一斉に襲いかかって来た。

「迷惑かけるな、悪い。」

翠と背中合わせになった四葉はその言葉を聞いた。

「大丈夫っすよ。てか、この人達誰っすか？」

「知らん。多分、この前倒した奴の仲間だろうな。」

「こんなに居たんすか?!」

「もつと居ると思うぜ。」

一瞬、同級生から聞いた言葉が頭をよぎる。

（そういや、今日はずいぶんいろんなことを聞いた気がする。）
そう考えて苦笑いする。やはり不良に狙われているのは、翠と誠が不良であるからだろうか。

（ま、そんな事カンケー無いんだけどっ！）

エアガンを撃つ。惜しくも狙いは外したが、一人をよろめかせた。
「よし。」

翠が間髪入れずに突きを放つ。悶絶する不良を床に転がして、翠は四葉の方を向いた。

「あんまり深くかわる前に、やめとけ。」

「へっちゃらっす。」

「きつと疲れんぜ？」

「翠さんたちと一緒に居られるなら万事OKっすよ。」

「それ、本気で言ってるのか？」

その問いに四葉は翠の居る方向にエアガンを構え引き金を引いた。
翠が眼を見開く。瞬間、翠の後ろに居た不良が倒れた。

「…あたばーっす。」

にやりと笑うと、四葉は踵を返して七星の元へ向かった。

（決まったっ！っ！）

内心で自画自賛しつつ七星に「大丈夫っすか？」と声をかける。

「大丈夫よ。あと滝久保君、今度あたばーの意味を調べてから同じセリフを言ってみなさい。」

「聞いてたんすか?!」

「ええ。」

微笑む七星。そして四葉の腕を掴むと、自分に襲いかかってくる不良へと投げた。

「ちょ…!？」

まともにぶつかる。慌てて距離を取ろうとすると右腕を掴まれた。
「ダメエ、誰だ？」

「…っうわ！」

腕を振り払おうとしたが意外に力は強い。それどころか左腕も掴まれる。

「先輩！何するんすか！」

繰り出される足をガードしながら、四葉は怒鳴った。

「言っただでしょう？私は頭脳しかないから、こういう戦いには向かないの。」

（そういう意味かよ！！）

そのうちに右腕の感覚がなくなっていき、エアガンが床に落ちた。

「武器は卑怯じゃねえか？」

薄ら笑いを浮かべる不良。その不良の背後からバチバチという音が聞こえてきた。

「…お前等がよく言う。」

不意に不良の身体が離れ四葉は解放される。よろけた四葉の耳に悲鳴が聞こえた。

「大丈夫か、四葉。」

「は、はい…。」

スタンガンのスイッチを切って、誠が落ちたエアガンを拾う。

「あ、ありがとうございます…。」

エアガンを受け取る。辺りを見回すと、ほとんど不良達は片付いていた。

「…なんで俺達を襲った？」

主犯格と思われる不良に翠が問いかける。ミオは翠に襲いかかってくる不良を気絶させていた。

「これでよし、と。」

パンパンと手を払うミオ。四葉は少し呆然とした思いで、エアガンを戻した。

「まあいい。教師探しに行こうぜ。」

翠はドアに向かう。その時、ドアが思いきり開いた。

「風紀委員か…って、え…？あ、これ…？」

時は少し前にさかのぼる。

「…できました！」

全ての答えを埋めて、雛子は弾んだ声で告げた。

「お、やったな雛子ちゃん。」

「んで、ゴールはどこ？」

優太と時紅がカードを覗きこむ。雛子は額に指をあててしばらく考え込んだ。

「ちなみに、今年のゴールは第8教室、家庭教室、美術教室、講義室、視聴覚室、保健室、図書室だよ。」

「マジで？」

「あたしの情報ネットワークをなめんじやない。」

得意げな顔をする春佳。その隣で、まだ考え込んでいる雛子を氷雨が覗きこんだ。

「何処になりそうですか、リーダー？」

「うー…。」

しばらく唸ると、雛子はポンと手を打った。

「家庭教室、です！」

「ほうほう。」

時紅がにやつと笑って雛子からカードを取り上げた。

「な、何をするんですか？！」

「答え合わせー。」

「間違つてなんかいません！」

「本当かあ？」

カードを奪い返そうとする雛子の腕をかくぐりながら時紅はカードを見た。

「…うん、うん。はいはい、なるほどね…」

「間違つてないでしょ？」

雛子が時紅を見上げる。時紅は笑ってカードで雛子の頭を軽くたたいた。

「合っていました。」

「でしょ。」

カードを受取って雛子は嬉しそうな顔をする。氷雨が軽く咳払いをした。

「さてさて、じゃもう行こうか。これだけ早いと先着25組様には間に合うね。」

春佳はにっこり笑って携帯を閉じる。

「そうですか。では、急ぎましょう!」

「でも、廊下は走らないようにな。」

走り出しかけた雛子に優太は言った。

「わ、解ってます!」

少し顔を赤くしながら、雛子は四人と並んで歩いた。

「七星さんはどうしてるかなー!」

優太が歌うように呟く。時紅はイラついたように優太を見た。

「何回目っすか、それ。」

「…優に十回は超えた。」

氷雨もそれに辟易しているらしい。もはや呼気全てが溜息と化している。

「だって、気になる。」

「だったら心の中で言ってください。」

優太は唇を尖らすと、春佳に向かって言った。

「七星さん何処に居るか解る?」

「あたしはGPSじゃないんだけど。」

「調べてくれたらもう言わない。」

春佳は溜息をついて携帯を取り出した。

「すごいですね、優太さん。」

「何が？」

明らかにイラついた様子の三人とは対照的に、くすくす笑って雛子は言った。

「好きな人をそこまでおおっぴらに好きって言えるなんて。」

「まあ隠してようがおおっぴらにしようが、好きなもんは好きだしね。」

優太は雛子につられるように笑った。そのうちに携帯を見ていた春佳が口を開く。

「解ったよー。崎宗さきむねさんの居場所は……」

その瞬間、近い場所から悲鳴が聞こえる。五人は一斉に声のした方を振り返った。

「……悲鳴？」

「のようだ、な。」

「男っぽいね。」

「なんだよ、また喧嘩かよ。」

呆れたように時紅が言う。雛子はざっと左右にある教室を見回した。
「手分けして探しましょう。風紀委員会として放っておくわけにはいきません。」

「ゴール近いのに……。」

残念そうに呟く時紅。すると春佳が雛子からカードを奪い、優太に手渡した。

「何？」

「これ、提出してきて。」

「なんで俺が……」

「早く！」

春佳の剣幕に、優太は何が何だか解らないような顔をして廊下を走り去った。

「では、私と氷雨は右を。時紅と春佳さんは左をお願いします。」

「りょうかい。」

そう言うと、四人は次々にドアを開けていく。

「氷雨、向こうをお願いします！」

「解りました。」

氷雨が走り去る。雛子は順々にドアを開けていった。

「風紀委員か……」

生物教室のドアを開け、その言葉が出た瞬間信じられないものが眼に映った。

倒れている複数の男子生徒。地面にへたり込んでいる一人の男子生徒。そして、自分と向かい合う形で立ち尽くしている女子生徒。

「つて、え……？あ、これ……？」

思わず動揺する。その瞬間、へたり込んでいた男子生徒が自分に向かって来た。

「た、助けてください！」

「え？」

「な……！」

少し高めの少年の声が聞こえてくる。雛子は深呼吸をすると、向かってきた男子生徒に尋ねた。

「……何があっただんですか？」

「問題探してたら、この人達が……！」

「違っ……」

見知らぬ少年が一人、一歩前に出てくる。

（落ち着け……自分。）

雛子はその少年に目を向けると、静かな声で言った。

「風紀委員会です。此处で何があっただんですか？」

言いながら、目で教室全体を見回す。立っているのは少年に、背の高い男子生徒。そして先程話題としていた崎宗七星の姿もある。

（主犯はあの男子生徒…かな。）

「僕等は何もしてないよ！」

その時、女子生徒の後ろからもう一人の人物が飛び出してきた。

（ミオ君！？）

思わず目を疑う。

「何もしてない！僕等がこの教室に入ってたならあの人達が居て、いきなり僕達を襲って…」

「ならば問うが、何故君達は此処に居るのか？」

雛子の後ろから氷雨が言った。

「氷雨…」

「ゴールは此処じゃないはずだよ。」

春佳が教室に足を踏み入れる。時紅も教室に入り、顔をしかめた。

「でも、ここが…」

そう言つて一歩踏み出しかけたところで、七星がその少年の進路に手を伸ばした。

「…黙つていなさい。」

「でも、先輩…！」

「俺達の言う事は、信用されねえよ。」

女子生徒が低く呟く。時紅はにっと笑うと「そういう事。」と言つた。

「この状況は圧倒的に、俺達に不利だ。」

雛子はうつむいているミオに声をかけた。

「…ミオ君。」

「…？」

「貴方は、何もしていませんよね？」

その問いにミオははっとしたように顔を上げた。

（何もしてないと、言つて。）

その思いをよそに、ミオは一瞬間をおいて答えた。

「僕は…」

「何もしてねえよ。」

先程の女子生徒がかぶせるように言った。

「っ?!」

「何も、してねえ。」

雛子は顔を女子生徒の方へ向けた。女子生徒も雛子を見返す。

「…そう、ですか…」

やがて眼を離すと、再び雛子は口を開いた。

「風紀委員会、貴方達を…」

新入生歓迎親睦会 14

（だ、誰…？）

四葉はいきなり出現した「風紀委員会」と名乗る人物たちに面食らっていた。

次々に色々な事が起こってしかし自分達が不利な状況にある事だけは理解できた。

「教師：クロス。」

（翠さん?!）

未だ不穏な言葉を呟く翠におののきつつも、四葉は中学制服を纏った風紀委員会の少女の言葉に耳を傾けた。

「風紀委員会、貴方達を…」

「はい、そこまで。」

遮るように男の声が聞こえた。と同時に準備室から誰かが出てくる。その人物はワイシャツにネクタイ、その上から白衣を羽織り、片手をポケットに突っ込んでいる。その出で立ちからすると教師らしい。

「先生…?!」

中学制服の風紀委員が眼を見開く。

「ヤバくなったんで参上。」

「遅えよ…」

翠が呆れたように言って、指を鳴らした。

「お前ら誤解してるよ。悪いのはこっち。一部始終は全部このテープの中に入ってる。」

そう言っつてその教師はポケットから手を出した。その手にはテープが握られている。

「でも、それじゃ、倒れている方々は…？」

「全員やられたよ、こいつらに。」

中学制服の風紀委員は、驚いたように立っている五人を見た。

「と言う訳で生き残り、無駄な抵抗は止めるんだな。」

にやつと笑って告げる教師。逃げ出そうとした男子生徒は風紀委員らしき男子に腕を掴まれた。

「話ならたつぷり聞くよ？」

男子生徒から力が抜ける。携帯をいじっていた風紀委員が、携帯を閉じて言った。

「今風紀委員呼んだ。みんなすぐ来るって。」

(…い、一件落着…なの、か…?)

テープを受取る中学制服の風紀委員を見て、四葉は安堵の溜息をついた。

「七星さん！」

到着してきた風紀委員の中に七星の名前を呼ぶ人が居た。

（誰…？）

四葉は首を傾げつつ七星を見る。すると七星はあからさまにいやな顔をしていた。

「…また来たの？」

七星の前に立った人物を見て、四葉は驚いた。

（て、レベル高！）

適度にバランスのとれた身体、厭味にならない程度の品格。

四葉は同性であるにもかかわらず、その男子生徒に見とれてしまった。

「何度でも来ます！貴方が振り向いてくれるまで！」

二人は周囲にほとんど聞こえないくらいの小声でやりとりをしている。

「しつこいわ。」

（せ、先輩…?!）

同性から見ても魅力的な人である。一刀両断はさすがに…と四葉が考えていると、七星は信じられない言葉を口にした。

「何度も言っているでしょう。私が振り向くのは10歳以下の男の子よ。それ以上の男に興味はないわ。」

（はああああ?!）

思わず耳を疑う。しかし何度考えても、はっきり「10歳以下の男の子」と口にしていただけに思えない。

「でも、俺と貴女はお似合いだと思います。」

「自意識過剰もほどほどになさい。」

四葉がショックで思考停止している間も、二人の会話は続いている。やがて男子生徒（「優太」と呼ばれていた）が別の風紀委員に呼ば

れて去って行った。

大きな溜息をつく七星に、四葉はおそろおそろ口を開いた。

「先輩、10歳以下はちょっと…」

「あら、聞こえてたの？」

七星は困ったように首をかしげた。そして唇に手を当てる。

「みんなには内緒ね。」

「は、はい…。それにしても、その年代のどこがいいんですか？」

そう聞くと、七星は四葉にぐっと顔を近づけて言った。

「目よ。」

「はい？」

「あの年頃の、少し生意気ながらも純粋で素直な瞳が好きなのよ。」

「は、はあ…。」

（意外な趣味だ…。）

少し引きつつも、先程の優太と言う男子生徒について少し聞いてみる事にする。

「あの人っていつもあなんですか？」

「ええ、毎日ね。さすがにみんなの前では優しく振舞うけど、嫌でしょうがないわ。」

「でも…いい人そうですよ？」

四葉がそう言うと、七星は少し俯いた。

「そうね、いい人よ。良い人すぎるくらいに。」

「？」

「ま、そんな事はどうでもいいのよ。それで滝久保君。」

「はい？」

「エアガン使用シーンはばっちり録られているかもね。」

そう言つて七星はくすくす笑う。そしてそのままくると背を向けた。

「え！？」

咄嗟の事に四葉は混乱する。そして意味を理解した瞬間、半泣きで七星の後を追った。

「待ってください、先輩！俺どうしたらいいんですかー？！」

新人生歓迎親睦会 後夜祭

午後十二時三十分。新人生歓迎親睦会は終わりを告げた。

「終わったつすね…。」

四葉達五人は屋上に居た。

（…結局、参加できなかったつす。）

四葉は溜息をつく。

後から聞いた事によると、あのカードは白衣の教師…生物教師の松^{まつ}浪^{なみ}…がオリジナルに作ったものであったらしい。

「奴等、新学期から生物教室に来るようになったんで迷惑だったんだよ。」

どうやら、翠達に不良を追い払ってほしかったらしい。

悪気もなくそう言って笑う松浪に、翠が容赦なく殴りかかっていた。
「終わったな。」

翠が呟く。残念そうな四葉とは対照的にその表情はどこか晴れ晴れとしていた。

（先生殴ったから、かな…）

少し苦笑すると、四葉は七星に声をかけた。

「七星先輩…俺、大丈夫つすかね…？」

「ええ。話は一応しておいたわ。」

そう答える七星に四葉は少し驚く。

「え、誰に？」

「風見さんっていう…携帯いじってた女の人ね…その人に話しておいたわ。」

四葉は胸をなでおろした。

「良かった…。」

「大変だったんだから。と言う訳で滝久保君、今週末何か奢って。」

「今週末って…明日じゃないっすか?!んな急な…」

「別にいいでしょう?。」

くすくす笑う七星。そしてふと四葉の後ろを見ると不思議そうに聞いた。

「あら誠、どうしたの？」

「誠先輩…？」

後ろを振り返った四葉は誠が居るのに気付いて驚く。

「何でもない。何の話をしている？」

誠は四葉の隣に腰を下ろした。

「今週末に滝久保君に何か奢ってもらえるの。」

「違うっすよ！！」

「俺も行つていいか？」

「誠先輩！」

「冗談だ。」

ふつと笑った誠の顔を思わずしげしげと眺めてしまう四葉。

「…なんだ？」

「いえ、なんでも…。」

（誠先輩、笑うんだ…。）

一瞬失礼な事を考えかけて首を振った。

「そうだ、打ち上げと言う事で滝久保君に奢ってもらいましょう。」

「なんでっすか?! いやっすよ! それに今月ピンチなんです…。」

（打ち上げには賛成出来るけど…）

思わず頭を抱える四葉。その時誠が口を開いた。

「だったら今から行かないか？」

「ほえ？」

「だから、今から打ち上げに。」

（今から、っすか?!）

突発的な考えに面食らう四葉。

「あら、良い考えね。行きましようか。」

しかしそれよりも先に七星が乗り気になったのに驚く。

「な、七星先輩?!」

「今行ったら滝久保君、ケーキで許してあげるわよ?」

立ち上がると口に手を当ててくすくす笑う七星。

「で、でも…勝手に学校抜け出したら…」

「早退届はちゃんと取るわよ。」

「本当にいいんですか？」

すると七星は笑顔を浮かべたまま、腰に手をあてて四葉を見降ろした。

「完璧な優等生でも風邪ぐらいは引くわ。」

「…」

（完全に行く気だ…）

「滝久保君、もちろん行くわよね？」

四葉は溜息をついた。しかし答えは一つしかない。

「行くに決まってるじゃないっすか。」

「そう言うと思ってたわ。」

早退届をとつてくると言う七星はドアへと向かう。四葉は誠と目を合わせると、思わず肩をすくめた。

「…ま、楽しい事は大歓迎っすけどね。」

「翠、なんで僕を庇ったのさ。」

いつの間にか誠の姿は消えていた。

「お前に迷惑かける訳には行かないだろ。」

空を見上げて翠は答える。ミオはその横顔をしばらく見つめていたが、やがて俯く。

「だからって、翠一人捕まろうとするなんて…」

「一人じゃねえよ。」

その言葉にミオは顔を上げた。翠はミオと目を合わせると微笑む。

「俺なら大丈夫だ。」

「…。」

ミオは手を伸ばすと、翠の頭を撫でた。

「どうした？」

驚いたような声が聞こえる。ミオは眼を閉じて首を振った。

「…ごめんね。」

小さな声で呟く。すると頬に軽く掌が当てられた。

「ミオは何にも悪いことしてねえだろ。」

「…。」

（護れるほど、強くなりたい。）

心の中でそう呟きながら、ミオは翠の頭を撫で続けていた。

新人生歓迎親睦会 後夜祭（後書き）

こんにちは。

新人生歓迎親睦会、完結をいたしました。

これはいわば後々出てくる人たちの「紹介」のような「説明」のようなものです。

この文章力ではそれもままありませんでしたが、今の精一杯のものです。何か至らない部分がありましたらご指摘お願いいたします。それではこれからも精進していきますので、どうぞこれからもこの小説をよろしくお願いいたします。

「あたりまえだろ…」

「そういえば…」

いつもの昼食時に四葉がぽつりと呟く。

「あたぼー…」

「あら、まだ言ってたの？」

七星の言葉に四葉は唇を尖らせた。

「だって気になるじゃないっすか。結局答え解んかったし。」

「まあ、多分誰も気にしないと思うが。」

翠がそう言って卵焼きを口に運んだ。するとミオが翠の横から顔を出す。

「何の話？」

「この前の時、『あたぼー』が何の意味かみんなで話してたんだよ。」

ミオは「うーん。」と首を傾げると、

「流行語かな？」

「聞いた事無いわね。まあ、滝久保君のセンスが古いつて言うのもあり得ない話じゃないけど。」

「俺のセンスは普通っす。」

「そういう人に限って普通じゃなかったりするのよね。」

「普通ですってば！ちゃんと大河ドラマも月9も見てるっすよ。」

「えー、四葉君火9とか日9とかは見ないの？」

「…今何やってましたっけ？」

帰ったらテレビ欄をチェックしようと考えつつ、四葉は話を元に戻す。

「で、『あたぼー』って…昔からあったような気がするっす。」

「ひそかに使われてきた言葉、ってどこか？」

翠が箸で四葉を指す。

「てか四葉。それ、どこで聞いたんだよ？」

「中学校時代の先輩が言ってたんすよ。なんか、『あつたぼうよ!』っていつつも言っていました。」

「勢いのある先輩ね。」

「ええ、まあ。時代劇好きな人でしたから。多分性格も昔の人みたいに なつちやっ たんですね。」

「…じゃあ、昔の言葉かもしれないな。」

誠がぼつりと呟く。思わぬ場所からの言葉に、四葉は思わず叫んだ。「誠先輩、聞いてたんすか?!」

「だいたいは。」

空になった弁当箱を閉じて「ごちそうさま。」と言ってから、誠は言った。

「習慣が無いから、食事しながら話せなかった。」

「そつすか…。じゃ、誠先輩も参戦つと。」

そう言つと、四葉は焼きそばパンから上手に焼きそばだけをすする。

「んで、『あたぼう』ってのは昔の言葉らしいと。」

「昔というと…縄文時代かしら?」

「さかのぼりすぎつす。だいたいその時代に言葉とかあるんすか?」

「あら、言葉は人類の発達に必要なモノよ。あるにきまつてるじゃない。」

「でも『あたぼう』って言葉は無いと思うつす。」

溜息をつくと、翠が軽く手を上げる。

「時代劇って言つと、戦国時代とか江戸時代とかか?」

「そうつすね。どっちかっていうと…江戸時代的な感じつすね。」

「江戸っ子の言葉、かな?」

「そんな感じがしますね。確かに。」

うんうんと頷くと、誠が手を上げた。

「意味的には肯定で合っているのか?」

「…肯定?」

首を傾げる四葉。

「同意とか、そういう意味で合っているのか?」

「あ、そうっす。合ってるっす。」

「意外とボキヤ貧なのね、滝久保君って…」

「何か言ったっすか？」

「いえ、何も。」

（聞こえなかった…。）

くすくす笑う七星を不思議そうに見て、四葉は再び誠に目を戻す。

「で、江戸時代っすか。うーん…思い浮かばないっす。」

四葉がそう言うと、七星が携帯を差し出した。

「なんっすか？」

「ググってみましょう。」

「ぐぐ…？」

聞きなれない言葉に首をひねる四葉。

「検索するって意味。四葉、知らなかったのか？」

「はい…機械オンチなんですよ、俺。」

そう言うのと四葉は自身の携帯を取り出す。

「これ、メールと電話くらいしか使えなくて。」

「え、これ最新機種じゃん！」

ミオがキラキラした目で四葉の携帯をいじり出す。

「入学祝いにつて買ってもらったんすけど、イマイチ使用用途が解らなくて。」

「結構高かったんじゃない？人気だからなかなか手に入らないんだよ、これ！」

「あ、いや…良く解らないので、とりあえず解る範囲で使ってます。」

「解る範囲ってどのくらいだ？」

「ですから、通話とメールくらい…」

「こついつのを宝の持ち腐れって言うんじゃないかしら。」

七星は溜息をついてミオから四葉の携帯を渡してもらう。

「高画質カメラもGPSもワンセグも赤外線もついてるのに、どうして使えないのかしら…？」

「七星さん、赤外線はついてないと…」

ミオが苦笑しながら言った。

「あら、私のはついてないわ。中学一年生の時から携帯変えてないの。」

「俺のは赤外線あるがワンセグは無いな。羨ましいことこの上ない。」

「そう言うのと、二人は揃って四葉の携帯をいじり始める。」

「ちょっと…返してくださいよー。」

四葉がそう言うのと七星は携帯の画面を見せた。いつの間にかネットワークに繋がっていたらしい。

「どうしても知りたいなら、検索してみれば良いんじゃないかと思っ
つて。」

「そう言うのと、検索ワードに『あたぼう』と打ち込む。素早い動作に感嘆しつつも四葉は七星に言った。

「そんな便利機能使えるんだったら、最初っから言っってください
す。」

「あら、だって最初から言ったらつまらないじゃない？こっ
うやって思いがけず滝久保君の携帯も見れた事だし。」

微笑む七星。あきれる四葉をよそに、翠と共に検索結果のページを覗きこむ。

「『あたりまえだ、べらぼうめ』…だってよ。」
「べらぼう…」

「江戸の言葉で『馬鹿、阿呆』みたいな意味だ。」

誠の言葉に納得する四葉。七星は携帯を返しながら言った。

「疑問は解決したわね。」
「そうっすね。」

すっきりした面持ちで、四葉はもうひとつ思い立った事があった。

「あ、ついでに皆さんのメアド登録したいんですけど、良いっすか？」
そして予鈴が鳴るまで、弁当を食べながら四葉達は携帯をいじっていた。

結論。

「滝久保君は色々古い。」

五月病

「はぁ……」

暖かな日の下、四葉は盛大な溜息をついた。

「あら、滝久保君が溜息なんて珍しいわね。恋煩いかしら？」

「違いますよ。なんて言うかこう……だらけちゃって。」

「……五月病か？」

誠が四葉の顔を覗きこむ。四葉はぼんやりとその顔を見つめ返して聞いた。

「五月病……っすか？」

「学校生活に適應できなかったりしてなってしまううつ病みたいなものね。」

「ち、違いますって！ちゃんと友達もいるし適應できてるし、楽しいっすよ！」

翠の視線を気にしつつも答える。幸いな事に翠はミオの方に視線を向けていて、四葉の言葉には気付かなかったらしい。

「ただ、何となくなんすよねえ……」

また溜息をつく四葉。その鼻先に七星はキャンディをちらつかせる。

「これでも食べて気分転換すればどうかしら？」

「なんすかそれ？」

「キシリトール配合のミント飴よ。」

「……遠慮するっす。オレンジ味無いつすか？」

七星が四葉の膝の上にオレンジ味のキャンディを落とした。

「あざっす。」

キャンディを口に入れる。甘い味が口の中に広がって、四葉は口元をほころばせた。

「やっぱ良いっすね、オレンジ味。」

「あら、ミントが良いわ。」

七星がミント飴の包み紙を破る。

「それにしても…私達と居る時はあまり五月病の気は見せないわね。」

「そりゃ、楽しいからっすよ。」

につこり笑う四葉に、七星もくすりと微笑む。

「翠さんと七星先輩と、誠先輩と、ミオさんと…」

（あ、そういえば最近ミオさんってよく来るっすね。）

それを伝えると、七星も不思議そうな顔をした。

「そうね。」

「どうしたんでしょうね…？」

「あら、滝久保君はミオ君が来るのは嫌なのかしら？」

「そんな事無いっすよ！ただ、ちよつと気になって。」

そう言いながらミオの方をちらつと見る。ミオは昼食を取りながら翠と談笑していた。

「ん？四葉君、何？僕の顔になんかついてるー？」

視線に気が付きミオが無邪気に四葉に手を振った。

「いえ…あの、ちよつと、最近ミオさんよく来るなって、思いまして…」

急に言われるとしどろもどろになってしまう。

（うわ、マジで「来るのが嫌だっと思われてんじゃないか」とか思われたらどうしよう…）

「ああー。あのね、最近友達が先輩たちとご飯食べてるんだ。」

しかしミオはさして気にする様子もなく、四葉の隣に座って言った。

「でも僕、その先輩あんまり好きじゃなくって。だからパスしてこっち来てるの。」

「そっなんすか…」

理由が解り納得する。ミオはくすくす笑うと、四葉が残したハムサンドを手を取った。

「食べて良い？」

「どうぞ、っす。」

もくもくとハムサンドを食べ始めるミオ。それを見ていた七星が溜

息をついた。

「あ、七星先輩も五月病…ってやつですか？」

「そうじゃないわ。あまり環境も変わらないし。」

「でもクラス替えとか無いんすか？」

「あるけど…似たような人達ばかりね。」

「似たような人達？」

「ええ。」

短く答えると、そのまま七星は翠の方に視線を移した。つられて四葉もそちらを向く。

「ん？なんだ？」

不思議そうな顔をする翠に、四葉は慌てて首を振った。

「あ、いえ…」

「はあ…四葉君が溜息なんかつくから、こっちも暗い気分になってしまったわ。」

「え?!」

「四葉、大丈夫か？」

「あ、はい！全然大丈夫です！」

翠に心配そうに聞かれ思わず叫んでしまう。それを見てミオがくすくす笑った。

「確かに四葉君が元気ないと、何か元氣なくなるかもね。」

「そうっすか？」

「四葉はいつも元氣だからな。でも、確かに元氣がないな今日は。」

「あ…今日はちょっと、そう、お日様が暖かすぎて眠くなっただけっす！」

（つーか絶対そうにきまつてる。）

ちなみに四葉の昨夜の睡眠時間は3：30。何をしていたかと言うと…ゲームである。

「四葉君らしい。」

「確かに。」

そう言うと三人は笑い始めた。四葉は一緒に笑いかけて、ふと気付

く。

（…え？三人？）

誠がいつの間にか居なくなっていた。

「じゃあ今日は放課後にでもみんなでどこか行くか。ミオ、今日は休部日だよな？」

「うん。だからヒマだよ。」

「よし、放課後河川敷の一本桜に集まろう。」

河川敷の一本桜とは翠と四葉の会った場所である。後で聞くと学校からもそう遠くなく、しかし生徒はあまり通らないので絶好の待ち合わせ場所らしい。

「りょうかい。」

おどけて敬礼するミオ。その時、予鈴が鳴った。

「もうこんな時間かあ。じゃ、また放課後ね。」

さよならとあいさつを交わして、ミオと七星と四葉はそれぞれ自分の教室に散っていった。

「あれ、誠先輩。」

教室に帰る途中、四葉はすれ違った人影に声をかけた。

（あ、ヤバかったかな…？）

しかし周りを見渡しても生徒がこちらを見ている様子はない。それに気づいてか、誠もゆっくりと振り向いた。

「途中で居なくなりましたか？」

「ああ…ちよつと、な。」

「あ、もしかして、先輩も五月病っすか？」

誠は少し目を見開くと、弱々しい微笑を浮かべた。

「多分そんなところだろうと…思う。」

いつもと違うような誠に四葉は戸惑ったが、これ以上聞いていると

授業に遅れそうなので要件を伝える。

「…解った。」

そう言うのと誠は再び背を向け、ふらふらと去ろうとする。

「あ、誠先輩！」

「何、」

振り返った誠は目の前に何かが飛んできたのに驚く。思わずそれを弾くと、それはころころと床に転がった。

「あっちゃ、失敗っす。」

四葉が額を叩く。床に落ちたものを拾い上げると、それはキャンディだった。

「…？」

「美味しいもの食べれば、五月病も多分少しはマシになると思うっすよ！」

そう言つて四葉は「やばっ、あと一分！」と叫ぶと、慌ただしく走つて行つた。

「…。」

取り残された誠はキャンディをしげしげと眺める。そして、思わず笑みをこぼした。

「…好きな味だ。」

偶然だとは思うが少し嬉しかった。

誠はキャンディを口の中に入れて歩き出した。さっきよりも少し軽い足取りで。

ライバル？

「…あの。」

することもなしにぼーっと空を見上げていた四葉は七星に顔を向けた。

「何かしら？」

「なんか、暇なんすけど。」

そついうと、七星は教科書から顔を上げた。

「あら、話してるだけじゃダメ？」

「そつじゃないんすけど…なんか、需要ないなど。」

溜息について四葉は言った。

「意味ないじゃないっすか、この会話。」

「日々の他愛ない会話に意味を見出そうとしても無駄よ。」

「いや、それって此処までの一連の会話が無駄だって言ってるようなもんじゃないっすか。」

「あら、意味を見いだせないからって無駄とは言えないわ。むしろその『意味を見いだせないもの』が意外と必要だったりするのよ。」

「そんなもんっすかね…」

「そんなものよ。」

四葉は上体を起こして周りを見た。相変わらず翠とミオは談笑しているし、誠は何やら音楽を聴きながら黙々と何か書いている。

「とは言っても…延々このままだと飽きてしまつかもしれないわね。」

「

「そつ思っつすよね？」

「そろそろ滝久保君がそついうと思って、呼んでおいたわ。」

「誰を？」

四葉が聞き返すと、七星は少し首を傾げて言った。

「そつね…ゲストかしら？」

次の瞬間、乱暴に屋上のドアが開けられた。

「…え？」

どこかで見たことのあるような中学校制服の少女がそこに立っていた。

（…えーと、誰だっけな…）

「来たわね。」

七星が立ち上がる。少女は七星を見つけると笑顔になった。

「こんにちは、雪原さん。よく来てくれましたね。」

「こんにちは。」

挨拶を交わす二人を交互に眺めながら、四葉が問う。

「あの、すみません…。誰でしたっけ？」

「…これで解りませんか？」

そう言つて少女は「風紀委員会」と書かれた腕章を差し出す。しかし四葉はそれでも解らなかった。

「風紀委員会委員長、雪原雛子です。」

「…えーと…」

四葉は頭を掻くと、ぽんと手を打った。

「ああ、あの『風紀委員会です。』宣言してた人か。」

「…まあ、そうです。」

雛子は七星に促されて座つた。七星と四葉も腰を下ろす。

「それにしても…滝久保君、『風紀委員会です。』宣言してた人、つて…貴方、機械オンチだけじゃなくて物覚えも悪いの？」

「いやあ、全然、名前とか知りませんでしたし。」

「あら、言つてなかったかしら？」

「雪原雛子は聞いてないっすね。なんか…ユータ？さんと、春佳さん？は聞きましたけど。」

「…そうですか。」

雛子は少し落ち込んだ様子だった。慌てて四葉は雛子に言う。

「で、でも覚えましたよ、ちゃんと。忘れませんかね。雪原…さん。俺の名前は滝久保四葉っす。」

「…はい、ありがとうございます。滝久保さん…。」

力なく微笑む雛子。慌てて四葉は話題を転換する。

「そ、そういえば、ユータさんも春佳さんも高校なのに、委員長の雪原さんは中学生なんすね？大変じゃないっすか？」

そう言くと、雛子は若干表情を曇らせた。

「正直大変です。でも…」

「あれ、委員長さんだ！」

その時、雛子に気付いたのかミオが言った。そして近づいてくる。

雛子の曇っていた表情が一気に吹き飛び、頬が紅潮した。

「…ミオ君…？」

（うつわ、解りやすっ！！）

それは一目でミオが好きだと思われる反応だった。女性に疎い四葉でさえ、その反応で瞬時に理解する。

「？顔赤いよ？」

「えっええと！多分さつき全力疾走したからだ、と思います。」

見え透いた嘘を言う雛子。しかしミオは何を疑う訳でもなく、「ふーんそうなんだ。」と言って納得した。

「それより雛子さん、今度の部内ライブ僕達出演するんだけど、来る？」

「いつ、いつです？」

「一ヶ月後の今日、16:00からだよ。」

「空いていると思います、たぶん。」

その会話を聞きながら、四葉は七星に聞く。

「部内ライブってなんすか？」

「軽音楽部がたまに開催する小規模なライブよ。この前も新入生歓迎のライブをしてたわ。」

「へえー…」

（ん、待てよ…？）

ふと四葉は誠の方を振り向く。誠は四葉の視線に気がつくと、イヤホンを外して近づいてきた。

「なんだ？」

「先輩って、軽音楽部の部長つすよね？」

それを聞くと、誠は少し驚いたような顔をする。

「どうしてそれを？」

「あー、あのー…聞いたつす。」

誰とは言わなかった。さすがに情報源を言う気にはなれない。誠もそれを察してか、何も聞かなかった。

「…あまり行かないから解らないが、一応紙の上では俺が部長だ。」

「じゃ、もしかしてミオさんって、誠先輩の後輩じゃないっすか？」

「…ああ、そう言う事になるな。」

すると横からいつの間にか来ていたのか、翠の声がした。

「あいつ、誰だ？」

いつの間にか座っている。四葉は翠に雛子の事を教えた。

「…ふーん。」

そう言うとき翠はライブについて話しているミオと雛子をじっと見た。その様子がいつもとおかしい。

何処か心配そうな様子だったし、イライラしているようでもあった。

四葉はそんな翠に違和感を感じて、翠に尋ねる。

「ひょっとして、妬いてます？」

「…ん…？」

「雪原さんとミオさんが話してるのに、妬いてます？」

翠は二、三回目を瞬く。しかし七星は急にくすぐすと笑いだした。

「なんで七星先輩が笑うんすか？」

「普通そついうものはつきりとは聞かないのよ。」

しかし四葉にはその言葉の意味が解らなかった。

「…妬いてる、とは違うな。」

翠は顎に手をあてて、ゆっくりと言う。

「ミオが普通に話しているのは解るし、雪原雛子が叶わない恋をしているのも解る。もし万が一二人がくつついたとしてもお似合いだとは思う。しかし頭では解っているが、それを考えるとイラついてくる。」

「それを妬いてるって言うんすよ。」

四葉が速攻で答えると、翠は驚いた顔をした。

「妬いてる…のか？」

「そうね、妬いてるわね。」

七星も頷く。翠は頬に手を当てると四葉の方に身を乗り出した。

少し辺りを見回しながら、小声で問いかける。

「…これ、普通の反応か？」

「はい。」

「ええ。」

四葉と七星が同時に答えた。

「むしろ女性はもっと激しいわ。」

「っーか妬かない方がおかしいっすよ。」

「…そうか。」

頷くと翠はミオの方を見た。ミオはどうやら話が終わったらしい、そのまま翠の方に向かってきた。

（意外と翠さんそういうの気にするんすね…）

翠が嫉妬するという事に少し意外だと思いながら、四葉は雛子に近づいてミオをぼーっとみている雛子に声をかける。

「雪原さん。」

すると雛子のはっとしたように四葉を見た。

「…ミオさんの事好きっすよね？」

「ど、どうして解ったんですか…!？」

（いや最初の反応を見て解らない奴の方がおかしい。）

「えーっと…何となくっすかね…。」

心の中で突っ込みつつも、四葉は答えた。雛子は首を傾げつつも赤面して答える。

「あの…絶対内緒にしてほしいんですけど…好きです、ミオ君の事。」

「…どうしてまた、ミオさんを？」

「…ライブの時に、ボーカルをしていたミオさんに一目ぼれしたん

です。」

「なるほど…。」

納得しながらも、聞けば答える正直さに半ば呆れる。その時雛子が翠を指して言った。

「あの人も、ミオ君の事好きそうですね…。」

「?!」

（いや好きも何も彼女っすからね?!）

ツツコミかけた四葉の口をいつの間にか来ていたのか七星がふさぐ。
「負けないようにしないと…。」

雛子の目の先には親しげに話すミオと翠の姿があつた。

「それより雪原さん、迎えが来ていますけど…。」

四葉を押しつけて七星が言った。入口を見ると、見慣れない男子生徒が一人立っている。

「時紅しぐれですね、解りました。それでは、崎宗さん滝久保さん、ありがとうございました！」

そう言つて雛子は去つて行つた。見送つてから四葉は七星に食つてかかる。

「なんで口ふさいだんすか！」

「ツツコミかと思つたからよ。駄目よ、彼女とか言つちゃ。翠はそれを望んでないわ。」

「…!」

（そうだ、翠さんそういう事されたく無いんすよね…）

「…解りました。」

頷いたとき、予鈴が鳴つた。

「じゃ、また！」

四葉は軽く片手を上げて屋上を後にした。

（新しい人の登場つてのも、なかなかいいっすね。）

次はだれが来るのだろうか、と、四葉は期待に胸を膨らませた。

雨の日の憂鬱

雨の日。

屋上が水で濡れてしまったので、四葉は久しぶりにクラスメイトと昼食を取っていた。

しかしどうしても話にはついていけなかった。

誰が誰を好きか、最近のゲームの話、それらの話を四葉はただ聞き流していた。

（翠さんと誠先輩はどうしてるんだろ…？）

聞き流しながら、いつも屋上に居る二人の事を考えていた。

「…つくしゅん。」

誠が不意にくしゃみをした。

「どうした？」

「…誰かが噂しているかもしれない。」

それを聞いて、頬杖をついた翠は少し口角を上げる。

「誰だ？ センサー達か？」

「意外に四葉かもしれない。」

「なんで？」

「今日は雨だから。」

音楽教室に二人は居た。校舎の端にあり目立たないその教室は、絶好の場所だった。

「そうか、四葉は知らないからな。」

「今度呼ぶか？」

誠が聞くと、翠は頷いた。

「そうすっかな。でも、気付くか？」

「…気付かなさそうだな。」

そう言つて誠は笑つた。

「…ごちそうさまでした。」

手を合わせると、翠はピアノの前に座つた。

「弾けるようになったか？」

「ちよつとは。でもまだ、ちよつとつかえる。」

そう言つと翠の指がピアノの鍵盤に触れる。

「弾いてもいいのか？」

「ああ。」

誠が許可を出すと、翠は若干緊張した面持ちでピアノを弾き始めた。
(…そんなに固くなる事は無いのに。)

誠は思わず笑みをこぼす。そして、弾き終わつた翠は座つたまま誠を見上げた。

「…どうだ？」

その眼差しが少し子供っぽくて、誠は意外に思う。

「…悪くない。」

そう言つと、不意に教室のドアが開いた。

「失礼しまーす。」

入ってきたのは、白衣を着た松浪だった。椅子に座つた翠と立っている誠を見て声を上げる。

「あ、今のピアノお前のだったんだ。」

「…何の用だ。」

翠が低く呟いた。かばうように誠はその前に立つ。

「そんな警戒すんなつて。」

松浪は肩をすくめると、プリントを誠に渡した。

「補習のお知らせだよ、ただの。」

そう言つと、「必ず来いよ！」と言つて戻つて行つた。誠はそのプリントに目を落とす。

「…補習…」

翠は椅子から立ち上がると、伸びをして言つた。

「七星先生の授業だけで十分だ。」

「裏がある、か…？」

「ああ、十中八九な。」

そしてプリントを奪い取ると、破り捨てた。紙屑が宙に舞って落ちる。

「あいつ、まだ俺を巻きこむつもりか…」

呟く翠に、誠は少し躊躇いながら肩に手を触れた。

「…どうした？」

首を傾げる翠。誠は何か言おうとしたが、言葉が出てこなかった。

「まあいい。俺、寝るから。」

そう言つて翠は教室の隅に移動する。誠はピアノに座つて、何ともなしに鍵盤をたたいた。

自分の気持は、解っているつもりだった。しかしその気持ちは、抑えられるどころか日増しに大きくなっていく。

翠は自分を隣に置いていた。そして「相棒」だと言ってくれた。

誠は翠が誠にしか見せないような部分もたくさん知っていた。しかし、翠が選んだのはミオだった。

（…翠を、護りたい。）

それがどんな理由からくるにせよ、誠はそれを実行しようとしていた。しかし出来なかった。

自分は弱くて、翠は自分より強かったから。

（…松浪…）

彼のする事、それが翠の今の生活の元凶だ。しかし自分がもっと強ければ、翠は普通の学園生活を送っていたはずだった。

松浪が翠にした事を、100%責める気にはなれない。

「…。」

ぐるぐる回る思考を抱えながら、誠は鍵盤をたたき続けた。

ミッドタームトラブル テスト期間 1

五月も過ぎ去り、今は雨の六月。

雨が降っていて未だ翠達と集まっていた屋上にも行けない。その為、先程から四葉は何度も外を見て溜息をついていた。

（どっか寂しいもんがある…）

かといって呆けているわけにもいかない。

テストが迫ってきているのだ。しかも四葉達のような途中編入組は、中学から居る松雲生とは少し勉強にずれが生じている。

また勉強法もカリキュラムも中学生とは違っているのについて行くのも大変なのである。その上テストとなると、いくら勉強時間が増えたとしても全てのテスト範囲を網羅するのは不可能だった。

しかし最初の頃は教師や先輩達がコツなどを伝授してくれる。そのおかげで、四葉達四年生はなんとか勉強についていけていた。

（頑張らないとヤバイ事になる…！）

シャープペンを握り直して集中すると、四葉は黒板に目を戻した。

とある音楽室。

授業中だというのに、その空き教室にはピアノの音が聞こえていた。

「その曲、良いな。」

机の上に組んだ腕に頭を寄せ、目を閉じて誠のピアノに聞き入っていた翠はぼつりと呟いた。

「トロイメライ。」

「…そうか。」

黙った二人の間をピアノの音色が流れる。その時、ドアの開く音がした。

「…なにか？」

現れた人物をちらりと見ると、翠は眼を閉じた。

「いやいや。なにか？じゃないだろ。」

その声が聞こえた瞬間、ピアノの手が止まる。

「ああ、止めなくても良い。」

ひらひらと手を振る松浪。誠は驚いて松浪を見た。

「…それを注意しに来たんじゃ、無いのか…？」

「いや、別件。」

そう言う松浪は椅子を持ってきて翠の向かい側に座った。翠は眼を閉じたまま一言。

「嫌だ。」

「まだ何も言っていないんだけど…」

困ったように言う松浪。翠は面倒そうに顔を上げると一気に言った。
「先に言うておくが、『補習サボったから来い』と『実はね…』から始まる話なら願ひ下げだ。」

「…」

黙り込む松浪に、翠はため息をついて顔を伏せる。

「その様子だと補習じゃないな。」

「うん…まあな。それもあるんだけど、メインは別件。」

「出ていけ。」

「いやちよつとき、話だけでも聞かないかな？」

「断る。」

「内容なんて聞いてみなきゃ解んないじゃない？」

「『実はね…』から始まる話以外ならな。お前の場合『実はね…』から始まった話は、ろくな話じゃない。」

会話をしつつも翠は机から顔を上げようとしなない。

誠は二人を見比べながら止めるべきか考えた。十中八九松浪は何か面倒な事を押し付けようとしてきたのだろう。この上なく翠は不機嫌になっていた。

（止めるべき、だな。）

そう思ったが、どう止めるべきか迷う。下手に口を出せばこの時期、

翠の逆鱗に触れかねない。

「とりあえず聞いて。話はそれから。」

しかし松浪がそういつた瞬間、誠は直感で感じた。

(…マズイ!)

そしてその刹那。翠が顔を上げて、松浪を睨み付けた。

「ふざけんなよ。それでお前、俺にいったい何させた?」

その迫力に誠は固まる。松浪ははつとしたように目を見開いた。

「これ以上お前の問題に巻き込まれんのはごめんだ。さっさと失せろ。」

そう言つと翠はまた顔を伏せてしまった。松浪は呆然と翠を見る。

「…解つた。ごめんな。」

やがてそう言つて立ち上がるとドアに向かった。誠はただ固まったままその様子を目で追つた。

松浪はドアに手をかけると、最後に振り返つて言つた。

「あ、その男言葉は直した方が良いぞ。」

その言葉を残したままドアが閉まる。翠は動かない。全ての音が、音楽教室から消えていた。

誠は何も出来ずに黙っていた。翠の手をこれ以上煩わせなくなつたのに、こうしてまた翠を煩わしくさせてしまった。

(…俺に出来る事…)

罪悪感を振り払うようにピアノに指を滑らせる。

そして、沈黙の空間にピアノの音色が響いた。

「…なあ。」

翠がぼそつと呟く。誠はピアノを弾きながら、身体を固くする。

「…?」

「その曲、なんだ?」

瞬間、誠は身体のを抜いた。

「月光。」

「…そうか。」

翠はそのまま黙つた。ふと翠の方を盗み見ると、翠は眠っている。

（こういうところは女の子らしい…。）

寝顔を見て誠はそう思う。それはたまに誠だけに見せる「顔」だった。

（こんなところがあるから、いつまでたっても無理なんだろうな…。）

通常は鈍感と言えるのだが、翠のそれは鈍感とは少し違う。強いて言えば思い込んでいる、と言っのだろうか。

「…。」

音色が聞こえなくなってしまうえば、きっと翠が起きる気がして。途切れる事なくそれは昼まで続いていた。

ミッドタームトラブル テスト期間 2

（あーもう、限界だっ。）

四葉は机をひっくり返したいのをこらえて苛々と指で机を叩いた。相変わらず四葉は教室で昼食を取っている。しかし目の前で繰り広げられる会話には全くついていけなかった。

毎日女子やロックバンド、部の先輩の悪口の話。女子とも縁が無く、帰宅部である四葉には理解ができないのだ。

（…翠さんどこ行きたい…）

頼杖についてぼんやりとそう思う。人のいなさそうな教室と言うのは解るのだが該当する教室はたくさんある。

しかも松雲南学園の校舎は広いので、下手をすれば迷ってしまいかねない。

（そうだ、メール！）

思い付いて四葉は携帯を取り出した。前に七星から教えてもらった方法で、メールアドレスを呼び出す。

（何処に居ますか…と。）

メールを作成していると、四葉の友人が横から覗きこんできた。

「四葉、何してんの？」

「なんでもない！」

さつとメール画面を手で隠して送信ボタンを押す。

「なんだよ、メール？誰？」

送信完了画面を見て友人が声を上げた。

「誰だっついていいだろ。」

「あ、もしかしてさ、親睦会の時の人？」

「は？」

（バレた…?!）

心臓が跳ね上がった。しかしその心配は一瞬で過ぎ去る。

「ほら居たじゃん、崎宗七星先輩！」

「…違う。」

「マジかよ？残念だなー。お近づきになったら紹介してもらおうと思っただのに。」

「…。」

ものも言えなくなつて四葉は友人の顔を見た。

「ん、何？俺の顔になんかついてる？」

答えようとした時バイブレーションが鳴る。

『第四音楽教室に居る。』

短い文面だったが居場所が解った。四葉は頭の中で地図を思い浮かべる。

（第四音楽室って…確か校舎の反対側だ。遠いな…。）

しかし走れば間に合うだろう。四葉は食べかけの昼食を持って立ちあがった。

「どこ行くんだよ？」

「ああ、ちよつと。」

「なんだよ、彼女？」

「違う。ちよつと軽音楽部について聞きに行くんだよ。」

翠が居るという事は誠もいるだろう。軽音楽部の事を聞きに行くといつものあながち間違いいではない。

「うっそ、四葉軽音興味あんの？」

「ちよつとな。んじゃ、行くわ。」

そう言つて四葉は教室を出ると全力疾走した。

「…こんに、ちは…」

ぜいぜいと息を切らせて第四音楽室のドアを開ける。

「久し振りだな。」

誠が立ち上がつて言う。息を切らせている四葉を見ると少し不思議そうな顔をした。

「どうした？」

「いえ、ちよつと…走つて、来たもんですから…」

絶え絶えになつた息で話すと、誠は笑つて椅子に座つた。

隣では、翠が机に顔を伏せている。

「どうしたんですか、翠さん？」

心配そうに尋ねる四葉に、誠は苦笑して言つた。

「起こしたんだが…起きないんだ。」

「寝てんすか？」

翠に近づく。すると気配を感じたのか翠が起きあがつた。どこか焦点の定まらない瞳が四葉をとらえる。

「翠さん、大丈夫ですか？」

「…あー…」

四葉の問いには微妙な反応が返つてきた。とりあえず机に昼食を置き、椅子に座る。

「誠、昼食…」

「その前に完全に起きな。」

「…んー…」

再び机に顔を伏せる翠。誠が背中を叩いても「んー」と言うだけで起き上がらない。

「…いつも寝起きつてこうなんすか？」

あまりの寝起きの悪さに四葉も少し苦笑する。誠は考えながら言つた。

「…俺が起こす時はだいたいこんな感じだ。いつもは解らない。」

「そうっすか。」

翠を見る。翠は再び眠り始めたのかすすつと寝息を立てていた。

ミッドタームトラブル テスト期間 3

「先に食うか。」

誠はブレザーを翠の肩にかけ、パンの袋を破る。四葉も昼食を手にとった。

「こんな場所… あったんすね。」

教室を改めて見回して四葉は呟いた。その言葉に誠は頷く。

「授業は主に第一と第二が使うからな。第四は軽音が使う教室だ。」

「部員は誰も来ないんすか？」

その問いに誠は苦笑してペットボトルを傾けた。

「第四は俺しか使っていないから。だから誰も来ない。」

「あ、そうなんすか…。」

（そう言えば誠先輩って、バンド組んでないっすよね…？）

四葉はふと疑問に思った。

誠が何度か楽器を手にして何かしている様子は見たが、バンドのメンバーを四葉は一度も見た事が無かったのだ。

「誠先輩って、バンド組んでんすか？」

四葉がそう聞くと、案の定誠は首を横に振った。

「前は先輩たちと組んでたんだが、引退してな。今は俺一人だ。」

「へー… ちなみに、どこやってたんすか？」

「ベース。」

「わ、カッコ良いっすねー。」

そんな話をしながら四葉は昼食を食べ終えていた。

ふと誠の昼食に眼を止めると、手にあるパンは一向に食べられた様子はない。

「先輩、食べないんすか？」

「… ああ、忘れていた。話しながら食べられないんだ。」

思い出したようにパンを口に運ぶ誠。四葉は慌てて頭をさげた。

「？」

「あの、すみません。ちょっと…聞いてばっかだったし、長話しちゃって。」

「？別に構わないが？」

「でも昼食、邪魔しちゃいました。」

「いや。」

誠はふっと笑って言った。

「翠以外との長話も、良いものだった。」

そして黙々とパンを食べ始める。四葉はそれを見て、呟いた。

「…そう言えば、久しぶりに誠先輩と話せた気がします。」

その言葉には誠は答えなかった。

四葉はする事もなく携帯を取り出した。するとメールが一件入っている。開いてみるとミオからのメールだった。

『四葉君、翠何処に居るか知ってる？』

四葉は翠を見た。翠は相変わらず眠っている。

（眠ってて、気付かなかったのかな？）

四葉にメールしてくるという事は、当然翠にもメールをしたのだらう。

（これ、教えるべきなんすかね…？）

四葉は迷った。翠が駄目と言う事は無いと思うが、万一と言う事もある。

しかし翠を起こすのも気がひけたので、誠に聞いてみる事にした。

「誠先輩、此処の場所って、ミオさんに教えてもいいっすかね？」

その言葉に誠は手を止めた。

「ダメっすか？」

誠はしばらくその体制で止まってから、ゆっくりとパンを下ろした。

「…翠に聞かないと、解らないな。」

「そうっすよね…。」

とりあえず『解らないです。』と送っておくことにした。

携帯を閉じた四葉は改めて誠と翠を見比べた。昼食を終えた誠は再びペットボトルを傾ける。

「…七星先輩は、この場所知らないんすか？」

「知らないと思う。」

「じゃあ、翠さんと誠先輩しか知らなかったんすね。」

「そうなるな。」

（この二人だけ仲良いんだろう？）

あるいは、古くからの付き合いだったのかもしれない。

「俺が知っちゃって良かったんすか？」

「…何故？」

「いや、何か…」

適当な言葉が見つからず口ごもっていると、誠は首を傾けて言った。

「秘密にしているつもりはない。だがわざわざ言っほどの事でもないと思う。」

「はあ…。」

四葉は良く解らないような顔でうなずいた。そして何気なく時計を見ると、授業開始の八分前。

「…げ！」

四葉は慌てて空のペットボトルとビニールを取り上げる。

「片づけとくが？」

「え、っと、大丈夫っす！それじゃ…」

走り出そうとして四葉は振り返った。

「明日も来ても大丈夫っすかね？」

その言葉に誠は頷いた。

「明日も雨ならな。」

それを聞くと、四葉は教室まで全力疾走した。

ミッドタームトラブル テスト期間 4

次の日は晴れであった。

「四葉君、元気ないみたいだけど。」

「…なんでもないっす。」

心配そうに聞いてくる七星に少し笑顔を浮かべて言った。

（はぁ…。）

心の中で溜息をついて、誠をちらりと見た。

誠は一人で音楽を聴いている。その雰囲気にはどことなく近寄りがたいものがあつた。

（せっかく、昨日はたくさん話せたのに。）

四葉は密かに空を仰いで、明日は雨になるよう願つた。

「あ、そーだ。ねえねえ四葉君。」

「はい、何すかミオさん。」

不意に声をかけられて四葉は振り返る。ミオは四葉のバッグを指さして言つた。

「四葉君の鞆に僕のノートまぎれてない？七星さんも調べてみて。」

「？解つたわ。」

「え？えつと…。」

バッグを探るがそれらしきものは無い。

「ありませんね…」

「ないわね…。」

「そっかぁ。」

肩を落とすミオ。七星がそんなミオに声をかけた。

「何かあつたの、ミオ君？」

「うーん…あのね、社会のノートが行方不明で。誰かのバッグとかにまぎれちゃつたのかなって、思つて。」

「それは大変っすね…」

「家にも無いのか？」

翠の問いにミオは頷く。

「心当たりは探したんだけどね、何処にも無いんだ。」

（ミオさんでもノート無くしたりとかするんすね…）

四葉は少し意外に思った。四葉の見る限り、ミオはとてもノートを無くすような人ではなかった。

「それにしても、ミオさんも大変っすね。」

「そうね。あの分だと事前ノート提出は間に合わなかったのかしら。」

「
松雲南学園ではテスト週間前に事前ノート提出が抜き打ちで行われる。」

これは生徒がどれだけ真面目に授業に取り組んでいるかを見るためのもので、その点数は授業態度に加算される。

「滝久保君はちゃんと出した？」

「えっと…まだっす。七星先輩は？」

「まだよ。多分明日辺り来るんじゃないかしら。」

「七星先輩のノートって、凄そうっすね…。」

「あら、授業で言われた事しか書いてないわ。」

そう言って七星は四葉に持ってきていた理科の授業ノートを見せる。

（…これ全部、授業で言われたこと…？）

絶句。その一言に尽きた。

板書の他に、先生が言ったどんな些細な情報も余すところなく書いてある。

「全部、書いてるんすか…？」

「ええ。私は翠と誠にも教えなくちゃいけないからね。」

「大変っすね…。」

「そんな事ないわ。お陰で内容は全て理解できるし、教えるから覚えられるしで一石二鳥よ。」

ノートをバッグにしまい笑いながら言う七星。

（やっぱ、七星先輩ってすごい人っす。）

四葉は改めて七星に尊敬の念を抱いた。

予鈴が鳴って、教室に向かう時。

「くれぐれもノート無くさないようにね。」

七星の言葉に頷いて、四葉は教室へと向かった。

教室で授業の準備をしていると、不意に友人の一人が声をかけてきた。

「四葉、俺お前に古典ノート貸してたっけ？」

「？いや、借りてないけど。」

「そっか…。」

「何、無くしたか？」

冗談半分にそう言っていると、友人は深刻そうな顔で頭を掻いた。

「そうなんだよな…多分。どっかに置き忘れたとかいう心当たりはないから。」

「大丈夫かよ？中間近いじゃん。」

「ああ。だから今めっさ困ってる…。四葉、もし無くしたらノート写さしてもらって良い？」

「げ。じゃあもうちょい真面目に書いとくな。」

そんなやりとりをしながら授業に向かう。

（何か、結構みんなノート無くしてんな…。）

少し心配になって、四葉はぎゅっと自分のノートを握りしめた。

ミッドタームトラブル テスト期間 5

次の日。

三時限目の社会でノート提出をしろと言われた。四葉は一応板書と友達から写し取った先生の補足事項を書き足して提出する。ふと横を見ると、先日の友人は机に顔を伏せていた。

「どうしたー？」

定規でぺしぺしと頭を叩くと、友人は起きあがった。

「やべえ四葉…俺、社会も無くしたかも。」

「マジで？」

いくらなんでも無くしすぎだろうと思いつながら四葉は友人の話を聞く。

「昨日までであつただけどさ…多分自習室で自習してた時に無くしたんだと思う。」

「ちよつとヤバくないかそれ？先生に言つた？」

「…言つてもさ、聞いてくんない気がする。」

「まあ、確かに阿野先生だからな。」

社会教師の阿野は、とにかく締め切りに厳しい先生である。

一日、一時間、一分遅れただけで提出物を受け取らない。

「諦めろよ。社会なら汚いけど見せてやっからさ。」

「サンキュー…四葉…。」

力なく笑つて友人はぱつたりと机に倒れた。

「…おかしいわ。」

その日の昼食時。七星がはつきりとそう言った。

「なんだよ？」

「どうしたんすか、七星先輩？」

「どうしたの？」

いきなりの発言に三人は戸惑いながら七星の方を向いた。

「滝久保君、昨日あなたに見せた理科の授業ノートあったわよね？」

「は、はい…。」

「あれ、私はどうしたかしら？」

「どうって…確か。」

あの後、七星は持参していたバッグにノートを入れていたはずだ。それを七星に伝えると、七星は頷く。

「そうよね。確かに入れたわ。」

「あの…それがどうしたんすか？」

「今日、私のバッグの中には理科のノートが入っていなかったの。そう言っただけで溜息をつく七星。四葉は手を上げる。

「昨日、出しちゃったとかじゃないんですか？」

「いいえ。あの一週間も理科のノートには手を触れていないわ。」

「えーっと…それで、それがいつたい、どーしたの？」

ミオの言葉に、七星はもう一度ため息交じりに答えた。

「私の理科のノートが無かったのよ。」

「え…？」

「なんだと？」

翠が身を乗り出した。七星は憂鬱そうに飴玉（ミント味）を口に運んでいう。

「おかげで事前ノート提出も出来なかったわ…はあ。」

「あ…そう言えば、うちのクラスにも居たっすよ。ノート無くしたっていう奴。」

四葉が友人をふと思い出して言った。その言葉にミオも反応する。

「四葉君のクラスにも居たの？」

「え？ってことは…」

「僕のクラスにも居たよ、そういう子！僕を含めて三人。」

「三人っすか…。」

「みんな『心当たりないのに。』って言ってた。」

「ああ、俺んとこの奴も言ってたつす。」

（これって偶然、なんすかね…？）

しかし少なくとも七星のノート消失はあり得ない話である。

「この学校で、同時に五人がノートを無くす…。しかも全員心当たりは無し、か？偶然とは思えないな。」

「ええ、確かに。これはきつと人為的なものだと思うわ。」

腕組みをした翠に七星は頷く。四葉も考えながら言った。

「確かに…もしミオさんと七星先輩以外の三人が偶然だったにしろ、七星先輩のノートは無くなってたんすからね。」

「ええ。あれはどう考えても不自然よ。」

「誰か盗んだ、って事だな。」

「そうね。問題はいつ盗んだか、かしら…」

いつになく真面目な表情で考え込む二人。その時、ミオがそつと抜け出そうとした。

「どうしたんすか、ミオさん？」

「あ、ごめん四葉君。僕これから勉強会なんだ。」

四葉の問いにミオは申し訳なさそうに両手を合わせた。

「ごめんね。それじゃ。」

そう言つてミオが屋上から居なくなる。四葉は二人の邪魔をしたくなかったので、誠の元へ行つた。

「…どうした？」

音楽を聴いていた誠はヘッドフォンを外して四葉に問う。四葉は事の顛末を誠に説明した。

「…大変だな、それは。」

深刻そうに言つと、誠も考え込んでしまった。

「…あの。」

「なんだ？」

「言葉通りの意味なんすけど…なんで七星さんのノート無くなって、そんな真剣に考え込んでんすか？」

誠は苦笑して言つた。

「七星の成績は七星だけのものではないからな。」

「どういう意味っすか…？」

首を傾げる四葉に、誠は説明を始めた。

「前に、俺達が七星から授業で習った内容を教えてもらっていると
言っただろう。」

「はい。」

「だから、七星が授業で習った内容が無いと、教えてもらえないため俺達も勉強できない。」

「あ、なるほど…。」

「それに、個人的に気になる事もあるからな。」

「個人的に？」

四葉が聞き返すと、誠は手を振った。

「取るに足らない事だ。」

「はあ…。」

急速に進んだ話についていけず、四葉は思わず溜息をついた。

（なんだか、また変な感じがする…）

ちなみにこの日は十日あるテスト週間の中の一日目であった。

ミッドタームトラブル 本試験 1

テスト週間二日目。

本来なら全ての部活動及び委員会活動は停止のはずである。

はず、なのだが。

「時紅^{しぐれ}、手を止めないでください。」

「…しんどい…」

風紀委員会は今日も忙しい。

学生自治のこの学園では、風紀委員会という仕事は他の委員会よりも数倍忙しいのである。

「死ねる気がする…」

そう呟いて、時紅は机に突っ伏した。最近早朝、昼休み、放課後、暇さえあれば風紀委員会の部屋にやって来て書類を見ている。

テスト期間は全ての活動が無い分問題は起きないはずなのだが、今年は何年と比べて問題件数が増えている気がするならない。

「どう見たって…あたし達を困らせるためにやってるとしか思えないーっ。」

春佳が学生からの投書を投げ出して椅子にもたれかかった。

ちなみに数十枚ほどの折りたたまれた紙のほとんどは白紙である。

「だらうな…去年より多いし。」

優太も溜息をついて山積みになった書類に目を戻す。そのほとんどが校舎内の器物破損や無断欠課等である。

「やっぱり…多いですか。」

雛子は読み終わった書類を次々と束ねて重ねていく。時紅はぐるりと四人を見回してから、ふへつと溜息をついた。

「時紅、リーダーを困らせるな。」

パソコンから眼を離さず氷雨が言った。

「だってこれ減らないんだもん…」

時紅は目の前の書類を眺める。三センチほどあるそれは均等に五人

に配分されていた。

これをほとんど氷雨が作っていると言っているのだから、時紅も感服せざるを得ない。

「それはお前の仕事が遅いからだと思う。」

「はいはい、わかりました。」

気を取り直して腕まくりをする。しかし、文句も言いたかった。

「てかさ、他の風紀委員会の奴は？」

「返しましたよ。」

「返した?!」

立ち上がりかけた時紅に氷雨が目を向ける。

「そう言う事無いだろう。他の委員に迷惑をかける訳にはいかない」とリーダーは考えたんだ。」

「まーじーでー。」

脱力すると、時紅はしぶしぶ書類を手に取った。

「ごめんなさい、私がつと効率よく出来ていたらしいのですが…」
すまなそうな雛子の声に、時紅は雛子の方をそつと見る。

「別に謝ることじゃないよ。勉強なら間に合ってるし。」

優太がのんびりとそう言つて、十センチの書類をトントンと揃えた。

「ふーおわりつ。雛子ちゃん、これ追加ね。」

「あ、はい、解りました。」

「じゃ、雛子ちゃんの半分貰うね。」

「そんな…悪いです。」

「いいのいいの。」

そんなやりとりを見ていて時紅は何となく苛ついた。

机の下で優太の足を思いつき蹴っ飛ばすと、書類を手に取って読み始める。そんな時紅をみて春佳がくすくす笑った。

「ちよつといいか？」

その時、ガラガラと扉が開く。現れた人物を見て、雛子が立ち上がった。

「なんでしよう?」

「暇…じゃ、なさそうだな。でも、今最優先で片づけて欲しい事が出来ただけだ。」

松浪は腕組みすると、扉の枠にもたれかかった。

「生徒会から。問題ができたんで至急解決するようにつて。」

生徒も帰宅してしまい人気のなくなった廊下に四人分の足音が響く。

「ったく、次から次へとさあ…」

溜息をつく時紅。それにつられて雛子も溜息をつく。

（これも、私が委員長だからでしょうか…）

松雲南学園創立以来初の中学生風紀委員長。それが雛子である。代々最上学年が任されていた委員長にしては異例の抜擢に、当然高校生達の反発は強い。今でこそ風紀委員会の中では信頼されているが、一部の高校生の風紀委員の中に雛子を良く思っていない者はまだ居る。

「それで、至急解決して欲しい問題とはどのようなものなのでしょう？」

氷雨の声に雛子のはつとして松浪を見た。

「俺もね、よく知らないけどなんか提出率が悪いんだってさ。」

「何のです？」

「事前ノート提出の。」

雛子の表情が曇る。その様子を察した氷雨が首をかしげた。

「偶然では？」

「偶然かもしれないし、微妙な数値なんだよ。だいたい七十五パーセント位。」

「七十五パーセント、ですか…。」

普段の提出率が八十五パーセントを下回らない事前ノート提出にシては最低の数値である。思わず俯いた雛子の肩を時紅が叩く。

「別に雛子のせいじゃないだろ。」

「まあ解らないけど、とりあえず裏でなんかありそうだなって考えた会長が調べて欲しいんだと。」

「いや知ってんじゃないっすかセンサー。それ聞いたらもう生徒会室行かなくても大丈夫じゃね？」

とりあえず話を聞きたため生徒会室に向かうという事で全ての仕事を春佳と優太に任せてきたのだ。

「一応これ大雑把な説明だからね…。」

頬をポリポリと搔くと、松浪は前を向いたまま言った。

「本当は風紀委員会の手を借りなくても済むはずだったんだが…手間かけるな。」

「ホントに。」

そう零す時紅を尻目に雛子は自分の頬を両手でたたいた。

(…すっかりしなきゃ。)

とりあえず今は落ち込んでいる場合ではない。目の前の仕事をこなす事に全力を尽くすのみだ。

「んじゃ、ちゃんと説明聞いてこい。」

生徒会室の前で四人は立ち止まった。

ミッドタームトラブル 本試験 2

テスト期間三日目の昼休みの事。

「とりあえず、だ。」

翠は額を押さえると、考えながら言った。

「…何から考えるか。」

「考えてなかったんすか。」

そう言いつつ四葉は今日聞いた事を言う。

「古典のノートに限らず、社会とか理科とかもノート提出率は悪いらしいす。」

「私のところもそうだったわ。理科のノートを無くした人、私のおにも居たらしいし。」

七星は肩をすくめる。ちなみにミオはテスト期間と言う事で友人達と勉強しているそうで、テストが終わるまで屋上には来ない。

「そう言えば七星先輩、理科の他にはノート無くしてないんすか？」

「そうね、数学と英語と公民もなくなってたわ。」

「…それ、もう先生に言った方が良くないっすか？」

「先生に言っても仕方ないわよ。ノートは自己管理しなくちゃいけないもので、無くすというのは自己責任だもの。」

その話を聞きながら翠は呟く。

「自己責任だから、か…。」

「どうしたっすか、翠さん？」

「ノートは自己責任だから、無くしたとしても自分の責任だ。多分盗った奴はそこ狙ったんだろっつな。」

自己責任なら、盗んだとしても自己管理の甘さで片づけられてしまっう。

「悪質っすねー…。」

そんな犯人に対して四葉は少し腹が立ってきた。それと同時に疑問も浮かぶ。

「てか、ノート盗んで何になるんすかね？」

「…私達を困らせるため、かしら？」

七星が首をかしげて言った。すかさず翠が聞き返す。

「でも七星はそんな要素無いだろ？」

「俺んこの友達も困らせられるような要素無いっすよ？」

四葉が聞く限りでは誰かとトラブルを起こしたという話はない。

三人は考え込む。すると、誠が話に参加してきた。

「四葉、お前の友達、頭はいいのか？」

「まあ結構。ミニテストいつも満点ですし。」

その答えを聞いて誠は呟く。

「なら成績を下げさせる為、とか。」

「どついう意味っすか？」

「七星もお前の友達も成績上位者だろう。だったら成績上位者の順位引き下げを狙ったか。」

翠は誠に異を唱える。

「でも、それだとまだ新入生の四葉達は関係ないんじゃないのか？」

「…全てのクラスで行われていたとしたら、新入生も例外ではないかもしれない。」

「滝久保君達とはぶちり、って事かしら？」

「そうなる。」

「ちょ、ちよつと…」

状況についていけず四葉は慌てて言った。

「解んないんすけど、それじゃ全部のクラスでノート無くした人が？」

「居るって事になるわね。」

「そんな事出来るんすか？」

「出来ない事はないが、まず各クラスでノートを無くした人がいるかどうかだな…」

考え込む翠を見ながら、四葉はそつと誠に言う。

「…これ、風紀委員会に任せた方が良くないっすか…？」

この学園では、学校内の問題を取り扱っているのは主に風紀委員会である。先生は風紀委員会の報告してきた始末書を元に指導を行う。各学年に居る風紀委員会に伝えれば、それを問題として解決してくれるはずだ。しかし誠は首を横に振った。

「風紀委員会に任せると面倒な事になるんな。」

「え？」

「…盗られたノートについての話聞いたり報告書作成するとかで、なるべく早くはするだろうが返ってくるまでに時間がかかる。」

勉強してない自分達には痛いタイムロスだと言って誠は苦笑した。

「今も勉強しているが、間に合うか自信がない。」

そう言っただけで教科書を振る。

（でも授業は出ないんすね…）

四葉はそう思ったが言わない事にした。

「じゃあ、クラスに一人以上ノート無くしたって解ればいいんだな。」

「…」
呟くと、翠は七星と四葉に声をかけた。

「二人とも放課後も此処に来られるか？」

「別に大丈夫です。」

「ええ、平気よ。」

「じゃあ、放課後も此処に来てくれ。」

四葉達は屋上を後にした。

ミッドタームトラブル 本試験 3

「うーん、確かにね…。」

同じく三日目の昼休み。

結局話を聞き終わった頃には下校時間となっていたので、再び昼休みに風紀委員会は集合していた。

ちなみに優太は先日終わった分の書類を届けている。

「あたしの情報ネットワークでは、ノートを無くしたって人がークラスあたり平均十人って聞いている。」

春佳が首を傾げる。雛子はそれを聞いて身を乗り出した。

「やはり成績上位者ですか？」

「うん。そのほとんどが、三学期学年末試験にて上位三十位以内に入ってる人達だよ。」

思わず、時紅と目を見合わせる。

昨日生徒会室にて詳しく話を聞いたところ、どうやら提出率が悪いのはノートを無くした事によるものらしい、そしてノートを無くした人々は少なからず成績の良い者だという事だった。

「でもそれでは、新入生は対象外となるはずですが…。」

氷雨が呟く。確かに新入生はまだテストを受けていないので、実力は解らないはずだ。しかし春佳は首を横に振って言った。

「新入生もちゃんと成績上位者だけがノート盗られてるよ。」

「なんでだよ？」

「うーん…解ないけど多分、日頃のミニテストの成績とかじゃない？」

「でも、解んなくね？」

「先生のパソコンにハッキングすれば解るよ。」

にやりと笑う春佳に時紅は肩をすくめた。

（先生のパソコンを…？でも、そんな手の込んだ事をするなんて…。）

雛子は思わず疑問を口にした。

「犯人は何がしたいのでしょうか？」

その言葉に三人は首を傾げる。

「単純に成績引き下げたいんじゃないか？」

時紅が言った。その言葉に雛子は首を振る。

「でもその為に新入生の成績まで盗み出すんですよ？それから成績が上位三十名分のノート、それを各科目で集めれば相当です。ましてや全ての学年から盗み出すとなると膨大な量になるでしょう。それらをすべてしてまで成績を引き下げたいなんて犯人、はたして居るのでしょうか？」

その言葉に思わず三人は黙り込んでしまう。

「…確かに、ちよつと手が込んでるよな。」

「よっぽど成績上げてほしいんだろうね…。」

改めて犯人の気味悪さに雛子は身震いする。その中で氷雨は冷静に言った。

「でも風紀委員会としては放っておけないです。そうでしょう、リーダー？」

その言葉で我に返る雛子。

（そうです。必ず見つけなくては…）

氷雨に向かって頷くと、口を開く。

「となると、単独での仕業とは思えないですね。」

「…そうですね。各学年に三、四人は居ると見ていいでしょう。」

「うつわー、全員探すの大変じゃない？」

声を上げる春佳に時紅が言った。

「何言ってますか。そんなに居たら、必ずトップでそいつら統率してる奴等が居るつしょ？そいつ捕まえれば、誰がノート盗ったか一発で解るじゃないですか。」

「確かに時紅の言う通りだ。それなら手間も省ける。」

頷くと、氷雨は雛子に言った。

「トップを見つければしょう。問題はどのように見つけるか、ですが。」

「成績上位者を対象にしているという事は、比較的成績の低い奴だな。その中でも下の学年に命令出来る学年…高校生あたりってこじゃない？」

急に聞こえてきた声に驚いて振り返る。そこには腕組みをした優太が居た。

「優太センパイ、居たんだ。」

「『居たんだ』じゃないよー！ずっと居たよ！」

「カッコよく登場しようとして失敗した図…ぷぷ。」

「笑わないで春佳！」

そう言いながら優太は控えめに席に座る。

「すみません、書類、ありがとうございます。」

「いーのいーの。」

ひらひらと手を振ると、優太は真剣な顔に戻って言った。

「てな訳で、そんな感じの人物像じゃない？」

「高校生ねえ…もっと範囲絞れない？」

春佳が額に手を当てる。

「じゃ、高校二年生以上。」

「『じゃ』って何？もう…高校生で調べてみるよ。」

「お願いします春佳さん。私達もなるべくあたってみますので…。」

「了解。」

春佳は額にあてた手を敬礼の形にした。

ミッドタームトラブル 本試験 4

「…どうしたんすか、これ。」

放課後屋上に来た四葉は思わず呆気にとられた。

「あら、滝久保君。」

先に来ていた七星が顔を上げる。その足元には、大量の紙が散らばっていた。

「いや『あら』じゃなくて。どうしたんすかこれ？」

風が吹く度にそれはひらひらと舞っている。拾い上げてみると何か書いてある。

「『割り込みしてくる人がいて困る。 高校二年生』…？」
「どうやら、学校に対しての意見のようだ。」

「よお四葉。」

その時ようやく気付いたのか翠が片手を上げる。

「こんにちは…。翠さん、これなんすか？」

手に持った紙を振ると、翠は言った。

「風紀委員会意見箱の投書。」

「…はい？」

（聞き間違いつすよね…）

しかし何度聞いても「風紀委員会意見箱の投書。」としか聞こえない。
「い。」

「…誠先輩。」

困った四葉は誠に聞いてみる。

「これ、何なんですか？」

「…風紀委員会意見箱の投書。」

（…なんでそんなもの…）

なんだか見てはいけないものを見てしまったような気がして、四葉は慌てて紙を戻した。

「な、なんでそんな投書見てるんすか？」

「もしも覚えがないのにノート無くして、それが何人も居たら偶然ではないと思うでしょう?」

七星の説明に四葉は頷く。

「偶然では無かったら事件と言う事になる。でも自分たちでは解決できないから、風紀委員会に解決してもらおうと思うわ。」

だから意見箱に寄せられた投書を調べているのだと七星は言った。

「…普通に人から聞けないんすか?」

「そももいかないわ。私達三人、人脈が無いのよ。」

苦笑する七星。

「でも先輩なら、あの、ユータ?さんから聞けないんすか?あの人脈広そうだし、風紀委員会だし。」

「嫌よ。」

速攻否定する七星に、四葉は少したじろぐ。

「そ、そうっすか…。」

そう呟くと、四葉は七星の隣に座って何ともなしに紙を手取る。見るべきかどうか迷っている、誠が四葉を振り返った。

「…内容はあまり見ていないから。学年とノート関連のもの以外は。」

四葉の気持ちを察したように言っ、読み終わった紙を重ねる。そのうちに、読み終わった紙を黙々と誠が重ねていくだけとなった。

「この量のほとんどが、白紙だった。」

隣にきた翠が呟く。

「実質まともな投書は無いに等しいな。でも、大体学年に三人位は身に覚えのないノートの紛失で困ってるって言う投書があった。」

(てか、風紀委員会にばれたら怒られないっすかね…?)

翠に伝えると、「バレなきゃいいんだよ。」と言われる。

(そこまでして七星さんのノート取り返したいんすか…)

翠がこの状況を楽しんでいるように見えるのは、四葉の気のせいだろうか。

「と言う訳で、決まりだな。犯人は成績上位者の順位引き下げを狙

「たった事だな。」

「…随分と回りくどい事をする。」

「ようやく全ての投書をまとめ終わった誠が言った。」

「こんな事する奴、あいつしか居ないな。」

「そうだな…一人しか浮かばない。」

「頷き合う翠と誠。四葉は少し首を傾げて七星に言った。」

「七星さん、誰だか解ります？」

「解らないわね…。」

「…あの二人、誰か、心当たりあるんでしょうか？」

「そのようね。」

二人に聞こうと口を開きかけた瞬間、屋上の扉が勢いよく開いた。

「風紀委員会です。」

雛子の声に思わず四葉はびくつとした。慌てて翠を見ると驚いた顔をしている。

（やば、バレてる！？）

ミッドタームトラブル 本試験 5

「…で？」

呆れたように溜息をついて、時紅が言った。

「崎宗七星…さん、のノートを取り返す為に、手がかりを見つけようと投書を漁ってた、と。」

「さん」をつけたのは後ろからの優太の無言の圧力からだった。

「はいっ。」

正直に四葉が頷く。時紅は深い深い溜息をもう一度つくつくと、雛子を振り返った。

「どうすんの？」

「…どこまで、知っている？」

代わりに口を開いたのは氷雨だつた。そして代わりに翠が答える。

「ノート無くしたつてのは誰かが意図的にそうしているんじゃないかつつーことで、

盗られてるのは成績上位者だけだから、犯人の目的は成績上位者の成績を下げることなんじゃねえかつつーことだ。」

明確な答えに少し氷雨は驚く。隣の雛子も驚いたようで、目を見開いた。

「マジ？そこまで調べた訳？」

時紅はちよつと眉を上げると、再び雛子を振り返る。

「どうしましょ？」

「…とにかく、投書の事については適切な処置をとらなければなりませんね。」

「そうだろうけど、こっちの事。」

集めた投書を春佳に渡すと、時紅は手で七星を指す。

「もうそこまで調べられてんよ？」

雛子はそつと深呼吸した。

驚いたがなんとと言う事はない。自分が言えるのはただ一つだつた。

「…七星さん。ノートについては、こちらでも全力で調べています。ですから、この件は私達にお任せください。」

「…！」

一歩前に出ようとした四葉を、誠が止めた。

「此処は、大人しくしていてくれ。」

小声で呟く誠に、四葉は唇を噛んだ。

七星は少し間を置く。そして頷いた。

「…解りました。」

雛子はそれを聞いてほっとした。風紀委員会の面々に「行きますよ。」

と声をかけて、屋上を後にする。

しかし階段を降りながらも、疑問は晴れない。

（なんで、ノートが盗まれた事を…）

踊り場に立ったところで、雛子は松浪に報告しなければ、と思った。

「バレてたんすね…。」

風紀委員会が屋上から去ったのを見届けてから、四葉が溜息をつく。

「…悪いな。」

もう少しちゃんとしておくんだっただ、と翠は呟いて座りこんだ。

「それにしても…どうするんすか？適切な処置って…」

「大丈夫よ。」

七星がにっこりと微笑む。

「絶対に、お咎めなしだと思うから。」

「へ？」

「きつとなしにしてくれると思うわ。」

七星は翠を振り返った。翠は少し嫌そうに顔をゆがめると、顔を背ける。

「本当は解っていたんでしょ？」

「…うるせえよ。」

「へ？え？」

状況がよく飲み込めずに四葉は首を傾げる。すると誠が身を乗り出した。

「七星はそれを解っていたのか？」

「解っていたわ。」

「…利用したのか。」

「いいのよ。前までのお返しだわ。」

意味不明な会話が続き四葉は聞くことしか出来ない。しかし思い切って口を開いた。

「あ、あの…とりあえず罰則とかはナシになるんすか？」

「そう言う事ね。」

七星が頷く。四葉はその言葉にほっとして笑みを浮かべた。

「良かったっす！」

「そうか…。」

雛子の話を聞いて松浪は頷いた。

「先生に話しておきたかったのです。それで、その人たちについての処置はどうしましょう?」

見上げる雛子の目を見て松浪は少し考える。

「…処置は俺が決めるから。お前等は安心して問題の解決に専念してくれ。」

「先生が、ですか?」

驚いた声を上げる雛子。松浪は少しおどけて肩をすくめると言った。

「おいおい。確かに俺は何の権力もない一物理教師だが、まがりなりにも生徒会担当という別の顔も持つてるんだぞ?」

「それは知っていますけど…」

「とにかく、その件は俺がやっとく。だからお前等は心配すんな。」

雛子は一瞬だけ不安そうに松浪を見上げると、「解りました。」と小さな声で言っただけ松浪に背を向けた。

誰も居なくなつた物理教室に静寂の空間が広がる。松浪は煙草に火をつけると、煙と共に溜息を吐きだした。

「…ったく、二度手間かけさせてくれる。あのあまのじゃくが。」

「で、心当たりがあるって言ってた人って誰だったんすか?」

四葉達は学校を離れ、近くのファミリーレストランに居た。

「ああ、その話か。」

翠はメロンソーダを飲み干すとひらひらと手を振った。

「今んとこお前は知らなくてもいいから大丈夫だ。」

「そんな、知りたいっすよ!」

四葉は机を叩いたが、頼んでいたショートケーキが来ると急いでフオークを手にした。

「隙あり、ね。」

「あーっ！」

しかし一瞬遅く七星に苺を取られ断末魔のような声を上げる。

「そうしたら、何かあるはずね…。ただ解せないのは、翠、あなたなんだけど…」

もぐもぐと苺を食べながら七星は翠に向って言った。

「私には理解できないわ。」

「そういう所があった方がいいんじゃないか？退屈しなくて。」

にやりと笑うとさりげなく翠は七星のモンブランを狙う。が、あっさりと阻まれ後退した。

「ちっ。」

「油断も隙もないわよ、私は。」

につこり笑ってモンブランを食べ始める七星。四葉はショートケーキを慌てて七星から遠ざけると、翠に聞いた。

「翠さん、それでこれからどうするんですか？」

「うーん、張本人から直接話を聞いても良いんだが…」

チョコレートケーキを口に運ぶと、翠は誠を振り返った。

「どうする？」

「…俺はあいつは苦手だ。」

「俺もだ。」

肩をすくめると、翠はフオークを口にくわえた。

「となると、張ってるしかないな。」

「そうだな。」

「何に行きつくと思う？」

「十中八九、グループの集い。それからプラスアルファ。」

「だよなあ…四葉。」

「はいっ。」

四葉が元気よく返事をする、翠はフオークで四葉を指した。

「四葉。お前、また俺達についてくるか？」

「あ、はいっ。そのつもりっす！」

すると翠は急に真剣な顔になり、声を低めた。

「…今回は来るな。」

「ええっ、なんでっすか？！」

突然の言葉に四葉は素っ頓狂な声をあげた。

「お前を危険な目にあわせたくねえんだよ。」

「それでも、行きたいっす。」

「お前、怪我すっかもしれねえぞ？」

「大丈夫っすよ。男に怪我は付き物っす。」

背筋を伸ばして答える四葉。さりげなく七星がショートケーキをちびちび取っているのには、気付いていない。

「なんでそんなに来たいんだ？」

「翠さんこそ、ここまで来たのに帰れはないっすよ。」

「いやそうじゃ無くてな、俺はお前に迷惑かけたくねえんだよ。」

「その言葉が俺にとって迷惑っすよ翠さん。」

溜息をついて言う翠に、むっとして四葉は返した。

「自分の事は自分の責任でやるっす。それで怪我しようがなんだろうがいい、俺の決めた事っすから。それに乗りかかった船には最後まで乗れって、親父にはよく言われてるから。」

「…それは言葉だけだろ。」

誠がぼつりと言う。その言葉は誠達にとって、中身の伴わない虚言でしかなかった。

「確かに、実際は解んないっすよ？でもやりたいっす。俺、翠さんについていきたいから。」

頭を掻きながらそう言う四葉に、翠は少し呆れながら尋ねた。

「なんで俺なんだよ？」

「それは…」

頭を掻く手を止めると、四葉は身を乗り出して言った。

「翠さんがカツコ良かったからっす。」

あの時桜並木の下で笑って感謝の言葉をかけられた、振り返って自分に右手を伸ばしてくれた彼女が、ひどく格好良く見えたから。

（そのカツコ良い人に、多分俺、惚れちゃったんだな。）

しかし惚れたと言っても、それは恋とは少し違う感情だった。

胸の奥が熱くなるような、その人とならどんなことでも出来るような、そんな感情だった。

「…それだけか？」

「はい。」

笑顔でそう言った瞬間、沈黙が訪れた。

「…馬鹿、ね。」

ごちそうさま、と両手を合わせた七星が、ぽつりと呟く。

「七星先輩、馬鹿って…ってああ！全部食われてる?!」

目の前のショートケーキの皿が空になっているのに気づく四葉。しかしそれを平然と見て、素知らぬ顔で七星は言う。

「隙を見せたら終わりよ？」

「酷いっす!」

両手を回しながら四葉は七星と言い争いを始めた。

「…本当に、馬鹿だ。」

口論の様子を見ながら誠は呆れて呟く。ちらりと翠を見ると、翠は笑っていた。

「翠？」

「ああ、馬鹿だな。すごい馬鹿だ。そんな馬鹿に気を遣ってた自分が馬鹿らしくなった。」

くくくと笑いながら、翠は四葉に言った。

「四葉。お前、生徒会から目えつけられるかもしれないぞ?」

「え、そんなにヤバいんすか？」

言い争いをいったん中断して、四葉は翠に向きなおる。

「言っただろ?やばいって。」

「でもそれでも、っす。」

「それがどれだけ解らねえだろ?」

そう言われると、四葉はにやっと笑って言った。

「… 実際体験してみるのも悪くないっすかね？」

「ははっ、そうだな。」

翠はさらに愉快そうに笑うと、チョコレートケーキを口に運んだ。

「よし、じゃあ四葉。最後までついてこいよ？」

「合点承知！っす！！」

にかっとなんて笑って四葉は拳を突き出した。

ミッドタームトラブル 本試験 7

「で、浮かび上がった人物は？」

時紅がそう聞くと、春佳はパソコン画面をトントンと指で突いた。

「黒田貴則。高校三年生でサッカー部のエースストライカー。まあ今は引退しちゃったから『元』サッカー部だけだね。」

「そいつが犯人？」

優太が弾んだ声で聞く。しかし、思いがけず春佳は肩をすくめた。

「うーん、なんていうかね……」

「何か問題でもあるんですか？」

雛子の言葉に春佳はうなずいてマウスを操作する。現れたのは成績表の一部だった。

「……これ、どこから手に入れた。」

「企業秘密。」

真顔で聞いてきた氷雨をさらりとかわして、春佳はある一文をドラッグした。

「ここね、彼の高校二年生の時のなんだけど……『相手を思いやるだけでなく、時には自分の意見を言うことも必要です。』ってあるの。」

「それがどうかしたの？」

「センパイ、頭いいんだから空気読んでください。てかそれくらい読み取ってください。」

絶対零度の声音でそう優太に低く呟くと、時紅は春佳に向き直った。
「てことは、あれだな？自分の意思はあまり表面に出さないタイプなんだな？」

「うん。部活でも結構怖かったらしいんだけど、確固たる自分の考えじゃなくて全部先生の受け売りだったみたい。」

「つまり、こいつは操り人形……？」

「そういうことになりますね。」

氷雨の呟きに雛子も頷いて賛同する。そして再び黒田の顔写真を見た。

整った顔立ちに何処か遠くを見るような眼差し。体格こそサッカー部に相応しいものの、顔だけを見れば文化部に所属していると思われる。そして、この人が掴めたから、とりあえず関連裏サイトを全部覗いたの。そして……」

そう言いながら春佳はカチカチとマウスを操作していき、一つのウインドウを開いた。

「これ。学園の裏サイトで、限られた……っていうか完全こつち側以外の生徒しかパス知らないようなサイトなんだけど……これに書き込みがあつたんだよね。」

雛子たちはその画面を覗き込む。掲示板のようなもので、いくつかあるスレッドの中に『成績が伸び悩んでいる人必見！』というものが見えた。春佳はそれをクリックする。

『成績が上がらない……。先生の言うことをメモしていても、取りこぼしがある……』

そんな人たち必見！特別にデキる人達の勉強法を公開しちゃいます！デキる人はここまでやってた！知りたい人は今すぐ此処にアクセス……』

以下、URLが貼ってあつた。

「で、此処を覗いたら……」

そう言いながら、春佳はまた別ウインドウを開いてしばらく画面をスクロールしていく。

雛子はスクロールされた画面を見ていた。どうやら、延々と勉強法が語られているらしい。

それはとても長かった。そして一番下に、こんな文字が見えた。

『此処まで読んだ人達、君たちは本当に勉強が思う通りに行かなくて、悩んでいるんだね。そんな君たちには特別に、デキる人達のノートを公開します。』

持ち主には許可を取っているので安心してください。希望者は、以下のリンクから誰のノートを借りたいかという希望と学籍番号の下二桁を入力して送信してください。折り返し受け渡し可能か、可能なら受け渡し場所と時刻を指定します。尚先着順となっておりますので、お早めに。」

「…これ、引つかる奴いるの？」

呆れたような時紅に、春佳は真顔で言った。

「高二、高一、中三は全部受け渡し不可。」

「それって、バレたから？」

「全部予約入ったから。」

「はあっ?!」

時紅の悲鳴をよそに、氷雨はふうつと溜息をついた。

「…情けない。」

「本当に…」

雛子はくらくらと眩暈がするのを感じた。ひょっとしたら自分のクラスの中にも、予約をしていた人がいるのかもしれない。

雛子も成績は良い。しかし中の上から上の下程度で、それほどできるという訳でもない。きつと予約をしているのは雛子より下か、同じレベルの人だろう。

(そんな事してまで、良い点数を取りたいなんて…)

優越感ではない。しかし、知らなかったとはいえこんな形でノートを借りて得た好成绩が、果たしてその人のためになるのだろうか。

「てかさ、下二桁ってなんで？」

「本人の識別のためでしょ。」

春佳が至極当然のように答える。優太は首をかしげた。

「下二桁じゃかぶる人多くない？」

「申し込んできたノートの年代で何年生かは判るっしょ。で、その中で下二桁探すだけ。」

「へえ、そうなんだ…」

優太は納得した顔でうなずくと、パソコン画面を指で叩いた。

「で、受け渡しはいつなの？」

「え、なんで聞くの？」

「え？約束、取り付けてきたんじゃないの？」

怪訝そうな優太。春佳はちつと舌打ちをした。

「頭いいんだから空気読めよ。そこは普通機転のきく春佳様を褒めるシーンだろうが。」

「はっはっは、頭がいいからその後の展開が予測できたんじゃないか。」

「いらないつてのそんな予知能力。」

春佳はそういうとさつと新しいファイルを開く。

「これ、うちのクラスの友達のカートタイ借りて申し込んできたの。」

受け渡し日は明日の四時、体育館裏。そうそう、受け取るノートは崎宗さんのだよ。」

その言葉にざらりと優太の眼が光った。

「何としても手に入れて見…いや七星さんに渡したい！」

「下心が丸見え。てかあんた、変態キャラになりたいの？」

春佳のツツコミにも耳を貸さず、優太は完全に自分の世界に入っている。

「てか体育館裏って…ベタだねえ。」

「ところで春佳先輩。友人に許可は？」

くすくす笑う時紅を一瞥して、氷雨は春佳に問う。

「取ってあるって。あたしを誰だと思ってるのー？」

くくつと笑う春佳。そして、雛子に向き直る。

「以上、あたしの情報ネットワークを駆使した結果です。」

「明日、四時に体育館裏ですね。」

雛子は確認をする。しかしその時、時紅が手を頭の後ろで組みながら言った。

「でも、確率は低くないっすかあ？黒田がそこに居るとは限らないし。」

「そうかも知れませんが、受け渡しという事は必ず人はいるはずで

す。その人物と黒田との接点があれば割り出せるはずです。」

「ま、まだ犯人が黒田つつー保証もないですけどね。」

その言葉に氷雨が割って入った。

「今はこれしか方法がない。ダメならまた方法を考えるまでだ。」

「…了解つす。」

だるそうに時紅は敬礼をすると、雛子を指した。

「で雛子、どうすんの？」

「…明日四時に、その待ち合わせ場所に行きます。」

雛子は少し考えた後、そう答える。

「ノートは回収。その場に居た人々には話を聞いてください。」

「了解。」

声をそろえて四人は言った。

ミッドタームトラブル 本試験 8

「明日、四時に体育館裏つすか？」

四葉が首を傾げる。翠は頷いて、三人の顔を見渡した。

「小耳に挟んだんだがな。そうらしい。」

「確かな情報か？」

誠がそう聞くと、翠はにやりと笑った。

「『偶然』風紀委員会の部屋の前を通りかかったら、聞こえたんだ。」

「それもう絶対偶然じゃないっすよね……」

「滝久保君、ツッコんだら負けよ。」

はあ、と溜息をつくると四葉は言った。

「今考えたんすけど、それって風紀委員会の人たちと衝突しちゃわないっすか？」

「そうだな。」

あっさりと頷く翠。

「どうするんすか？俺、退学だけは嫌っすよ？」

「大丈夫だ。良いところ嚴重注意程度にしかない。」

「え？なんでっすか？」

「向こうには結構な借りを作ってんでな。」

でもな、と翠は眉をあげる。

「それで行くと七星のノートは取り返せても、ミオのノートが取り返せねえ。」

「あ……！」

（そうだ、忘れてた！）

ミオも確か、ノートを盗られていたはずだ。

「でも、ミオさんは同級生と勉強してるから、そんなに支障はないんじゃない……」

そういうと、翠は少し複雑な面持ちで黙り込んだ。

「…そうだな。」

そして短く一言言つと、七星に向き直る。

「七星。」

「私は行かないわ。」

翠の言葉をさえぎつて七星は言つた。

「わかつた。それじゃ、明日四時だ。」

「誠先輩。」

帰りにかけた誠の背中に四葉は呼びかけた。

「…何だ？」

「あの、なんかあるんですか？」

誠の隣に並んで歩きながら、四葉は問う。心なしか誠の歩く速さが上がった気がした。

「なんで七星先輩は来ないのかな、って思つて。」

「…優等生が巻き込まれたら、ヤバいからじゃないのか。」

「ああ、なるほど。」

胸の片隅で起きた七星に対する反感を四葉は無視することにした。

「あと、翠さんやたら生き生きしてるのはなんでっすか？」

「…そういう、性格だからな。」

「え？」

「いや。」

手をひらひらと振ると、誠は言つた。

「早く帰つた方がいい。テスト期間中に残つてると、教師がうるさい。」

「あ、はいっ！」

元気よく答えて、誠の背中を見送つてから…。

（…え？）

さーっと四葉の顔から血の気が引いた。

（ヤバイ、テスト期間だった！！）

そろそろテストが迫ってきている事に気がつく。

（…勉強、しなくちゃいけない…。でも明日は…）

三分間その場に立ち尽くして悩んでから、結局四葉は開き直った。

ミッドタームトラブル 本試験 9

「…で？」

翌日の午後三時五十五分。

（なんか前にもあったよな…このパターン。）

そんな事を思いながら、四葉たちは体育館への道で風紀委員会と対峙していた。

「一度ならず二度までもまだ、崎宗七星のノートを？」

「七星さん、だ！」

優太の怒声を無視して、時紅はため息交じりに言った。

「俺たちとここに任してくれって言ったじゃん。」

「七星はそう言ったがな、俺たちはそうは言っていない。」
悪びれずに翠が答えた。

「それにまあ、友達思いなもんで。」

「よく言うよ。」

溜息をついて、時紅は雛子を振りかえった。

「どうすんの？」

「…どうして此处が解ったんですか？」

雛子は痛む頭を押さえて翠に聞いた。

「『偶然』だよ。」

「絶対偶然じゃない…」

春佳が顔をしかめて呟く。

「とりあえず動けないようにしておきますか、リーダー？」

「校則だけでなく法律に抵触するような行動はやめてください。」

雛子は指を鳴らして問う氷雨を窘めた。

「…犯人は、黒田貴則って考えてるか？」

翠の言葉に、驚いて雛子は翠を見た。

「どうして知ってるんですか？」

「さあ？」

翠は不気味に笑っている。

（え、知ってんすか？）

「顔に出てるぞ。」

動揺を隠せない四葉に誠が小声でつぶやく。

「だが違うな。黒田じゃない。」

「じゃあ誰？」

春佳が一步前に出る。その様子から動揺しているのが見てとれた。

翠は少し首を傾げると、すっと指を指した。

「その小鳥遊なら知ってんじゃないの？」

「え、俺？」

風紀委員会の視線が優太に集まる。

「知ってるの？」

「いや、知らないよ！」

優太は必死にばたばたと手を振って否定した。

「素直に吐いた方が身の為っすよ、優太センパイ。」

「いや、ちよっと、目がマジですけど?!」

「優太さん…」

「ちょ、雛子ちゃんまで?!」

「リーダー！」

厳しい氷雨の声が雛子を引きとめた。おもわずそちらを見ると、もう三人は消えている。

「…あ！」

「おい氷雨、どうしてくれんだよ。」

「なんで俺なんだよ！」

慌てて雛子は体育館裏へと走り出した。

「翠さん、犯人知ってたんすか?!」

四葉は走りながら翠に問う。

「ああ。」

「じゃあ、その人に直接行けばいい話じゃないっすか!」

「だが居ねえんだよな。」

「居ない...?」

不思議そうに問いかける四葉。後を引き継いで誠が言った。

「学校に来ていない。来ていても、姿を見せないんだ。」

「え、そうなんすか?!」

「まあ、風紀委員会の奴らは知らねえだろうがな。」

体育館の角を曲がって、翠は足をとめた。

そこには机が一つ置かれていて、ノートが置かれていた。

「あれ、七星先輩の...?」

一歩踏み出した四葉の前に、翠の手が差し出される。

「居るか、山内!」

そう言い放つ翠。そして、一瞬後。

「居るよー。」

間の抜けた声とともに、近くの木から誰かが飛び降りてきた。

(だ、誰?)

身長は四葉と同じくらいだろうか。しかし四葉にとっては見た事もない制服を着ている。

「なんでバレたの?」

山内と呼ばれたその人物は、立ち上がると首を傾げた。

「こんなくだらないことを本気するのはお前だけだろ。」

翠の声は驚くほど冷たかった。

「どうせ馬鹿どもに頼まれたんだだろうがな。」

「うん。みんな『頭良くなりたいたい。』って言ってたからね。大した

努力もしないでさ。」

肩をすくめて、山内はおかしいよねと溜息をつく。

「だからまあ、僕が『頭が良くなる』のを手伝ってあげたわけ。ノートあげたら、馬鹿どもは皆喜んで帰って行ったよ。」

くすくす笑う山内。四葉は思わず山内に寒さを感じていた。

「まあ、喧嘩や騒ぎが大好きなお姫様がでしゃばってくるのも計算内だけだね。だからこれ盗んだんだし。」

机の上のノートをとると、左右に振る。

「まだあいつに未練あるの？」

「お前には関係ない。」

そのノートを返せという翠の言葉に、山内は頷く。

「良いよ。今回は目的もう果たしたしね。」

「他のノートは？」

「机ん中。あと十冊入ってるから。」

そういうと山内はノートを投げ出した。地面に落ちたノートを四葉が拾う。

「あれ、新しい人だ。」

「あ、はい…滝久保四葉っす。」

条件反射で返事をする、山内は笑って言った。

「面白いね、キミ。その二人よりさ。…あ、もうそろそろ来るかも？行こうクロ。」

「ああ。」

木の上から飛び降りてきたのは、黒田貴則その人だった。

「じゃあね、情緒不安定姫とヘタレ従者。あと、面白い人。」

くるっと背を向けると、山内達は体育館の角を曲がって姿を消した。

「…逃げるぞ。」

「…え？」

瞬間、誠がそう呟いて翠の手を取り、走り出す。訳が分からないまま四葉もそれに続いた。

「風紀委員か…っと。」

すれ違った三人に目を丸くする時紅。しかし誠のスピードに追い付こうとしている四葉では、それを見ることは出来ない。

「なんで逃げたんですかあいつら。」

「きつと、これだからでしょうね。」

雛子が呟いた先には、十五人ほどの不良。

「…やれやれ、今回はバトル風紀委員？」

「俺たちデスクワーク派なんですが。」

優太と春佳が溜息をついた。その一歩前に出て、時紅と氷雨が指を鳴らす。

「じゃあ下がってくださいつす先輩たち。」

「俺たちはどちらかというと武道派なので。」

「…私はノート確保に。」

雛子はやれやれと首を振ると、言った。

「風紀委員会、これから彼らとノートを確保します。」

「了解！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3150i/>

下剋上！

2010年11月14日09時25分発行